

「失敗に終わる小羊の吟味」

マコ 12 : 28～34、マタ 22 : 41～46

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①イエスの最後の1週間について学んでいる。
- ②きょうの出来事は、火曜日に起こったものである。
- ③イエスは、神の小羊として4つのグループの指導者たちから挑戦を受ける。
 - *イエスに挑戦した最初のグループは、祭司長とパリサイ人たちである。
 - *第2のグループは、パリサイ人とヘロデ党の者たちである。
 - *第3のグループは、サドカイ人たちである。
 - *第4は、ひとりの律法学者である。
- ④今回は、第4の挑戦とイエスからの挑戦の2つの部分を取り上げる。
- ⑤この2つの挑戦のテーマは、今日でも重要な意味を持っている。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 135 ひとりの律法学者の質問

マコ 12 : 28～34、マタ 22 : 34～40

§ 136 メシアの家系に関するイエスの質問

マコ 12 : 35～37、マタ 22 : 41～46、ルカ 20 : 41～44

2. アウトライン

〈ひとりの律法学者の質問〉

- (1) 律法学者の質問 (28 節)
- (2) イエスの回答 (29～31 節)
- (3) 結末 (32～34 節)

〈メシアの家系に関するイエスの質問〉

- (1) 質問① (41～42 節)
- (2) 質問答② (43～45 節)
- (3) 結末 (46 節)

3. 結論：

- (1) 隣人愛について
- (2) キリストの2性について

小羊の吟味から、律法の本質について真理を学ぶ。

I. ひとりの律法学者の質問

1. 律法学者の質問（28 節）

Mar 12:28 律法学者がひとり来て、その議論を聞いていたが、イエスがみごとに答えられたのを知って、イエスに尋ねた。「すべての命令の中で、どれが一番たいせつですか。」

(1) ひとりの律法学者

- ①彼は、パリサイ人である。
- ②イエスがサドカイ人を論破したので、大いに感動した。
- ③彼には、敵対心や隠された動機はない。
- ④純粋な思いから、イエスに質問をしている。

(2) 質問内容

- ①モーセの律法が今回のテーマである。
- ②これは、律法学者たちの間で常に議論されてきたテーマである。
- ③伝統的に、モーセの律法には 613 の命令があるとされてきた。
*365 の禁止命令、248 の積極的命令
- ④613 の命令は、重要な命令と軽い命令に分類される。
- ⑤すべての命令をひとつの命令に要約すると、どうなるか。
- ⑥以上が「すべての命令の中で、どれが一番たいせつですか」という質問の背景。

2. イエスの回答（29～31 節）

(1) 29～30 節

Mar 12:29 イエスは答えられた。「一番たいせつなのはこれです。『イスラエルよ。聞け。われらの神である主は、唯一の主である。』

Mar 12:30 心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』

- ①これは、申 6：4～5 の引用である。
「聞きなさい。イスラエル。【主】は私たちの神。【主】はただひとりである。
心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、【主】を愛しなさい」
- ②最初の「聞け」という言葉を取って、「シェマ」と呼ばれる箇所である。
- ③敬虔なユダヤ人たちは、朝と夕に、これを唱えていた。
- ④ユダヤ教の根幹をなす命令である。
- ⑤【主】とは、ヤハウェである。契約を守るお方、イスラエルの神である。

*ギリシア語では、「キュリオス」と訳されている。

- ⑥「【主】はただひとりである」とは、比類なき神という意味である。
- ⑦「あなたの神である主を愛せよ」は、意志を働かせよという命令である。
- ⑧それを補足するのが、「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、」である。

⑨訳文の比較

「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして」(申6:5)

「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして」(マタ12:30)

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして」(新共同訳)

「heart、soul、mind、strength」(KJV)

- ⑩イエスは、人間存在のすべてをかけて神を愛するように命じた。

(2) 31節

Mar 12:31 次にはこれです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』この二つより大事な命令は、ほかにありません。」

- ①これは、レビ19:18の引用である。

「復讐してはならない。あなたの国の人々を恨んではならない。あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。わたしは【主】である」
- ②神への愛と隣人愛とは、密接に関係している。
- ③モーセの律法を要約すると、この2つの命令に収斂する。
- ④マタ22:40

「律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです」
- ⑤この2つの命令が実行できたなら、律法のすべてが実行できたことになる。
- ⑥この2つの命令は、十戒の中にはない。

3. 結末 (32～34節)

(1) 32～33節

Mar 12:32 そこで、この律法学者は、イエスに言った。「先生。そのとおりです。『主は唯一であって、そのほかに、主はない』と言われたのは、まさにそのとおりです。」

Mar 12:33 また『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして主を愛し、また隣人をあなた自身のように愛する』ことは、どんな全焼のいけにえや供え物よりも、ずっとすぐれています。」

- ①彼は、イエスの回答に同意した。
- ②これは、霊的現実と儀式的清めの関係に悩む人への教えである。
- ③霊的現実こそ、より重要である。
- ④彼は、「神」という言葉を意図的に避けている。

(2) 34 節

Mar 12:34 イエスは、彼が賢い返事をしたのを見て、言われた。「あなたは神の国から遠くない。」それから後は、だれもイエスにあえて尋ねる者がなかった。

- ①この律法学者は、イエスに対して心が開かれている。
- ②その後彼が救われたかどうかは、分からない。
- ③4つのグループによる小羊の吟味は終わった。

II. メシアの家系に関するイエスの質問

1. イエスの質問①（41～42 節）

Mat 22:41 パリサイ人たちが集まっているときに、イエスは彼らに尋ねて言われた。

Mat 22:42 「あなたがたは、キリストについて、どう思いますか。彼はだれの子ですか。」彼らはイエスに言った。「ダビデの子です。」

(1) パリサイ人たちへの質問

- ①パリサイ人たちが質問しなくなったので、今度はイエスが質問する。
- ②これは、キリストに関する理解を引き出すための神学的質問である。
- ③キリストはだれの子であるか。
- ④パリサイ人たちは、イエスがメシアだとは信じていなかった。
- ⑤イエスは「私を誰だと言うか」という質問ではなく、一般論的な質問をした。

(2) 回答はすぐに来た。

- ①「ダビデの子です」
- ②当時の人たちは、メシアがダビデの家系から誕生することを知っていた。
- ③しかし、メシアはそれ以上のお方であることを理解していなかった。

2. イエスの質問②（43～45 節）

Mat 22:43 イエスは彼らに言われた。「それでは、どうしてダビデは、御霊によって、彼を主と呼び、

Mat 22:44 『主は私の主に言われた。／「わたしがあなたの敵を／あなたの足の下に従わせるまでは、／わたしの右の座に着いていなさい。」』／と言っているのですか。

Mat 22:45 ダビデがキリストを主と呼んでいるのなら、どうして彼はダビデの子なのでしょう。」

(1) 詩 110：1 からの引用（ダビデの賛歌）

「【主】は、私の主に仰せられる。『わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまでは、

わたしの右の座に着いていよ』

- ①イエスは、ダビデが聖霊によって預言を語っていることを認めている。
- (2) ダビデはキリストを主と呼んでいる。
 - ①なぜ「ダビデの子」である人物を、「私の主」と呼ぶのか。
 - ②最初の「【主】」は「ヤハウエ」である。
 - ③次の「私の主」は、「アドナイ」である。

3. 結末（46節）

Mat 22:46 それで、だれもイエスに一言も答えることができなかった。また、その日以来、もはやだれも、イエスにあえて質問をする者はなかった。

- (1) イエスの神性を認めないなら、誰もこの質問に答えることはできない。
 - ①イエスにあえて質問をする者がいなくなった。

結論：

1. 隣人愛について

- (1) 神への愛と隣人愛とは、いわば車の両輪である。
- (2) 1ヨハ4：19～21
「私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです。私たちはこの命令をキリストから受けています」
- (3) 神への愛が、隣人愛の土台である。
- (4) 隣人愛は、神への愛の証明である。
- (5) 「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」
 - ①誰でも自己愛を持っていることが前提として語られている。
 - ②自己愛に焦点を合わせて生きることを禁じている。

2. キリストの2性について

- (1) 「あなたがたは、キリストについて、どう思いますか。彼はだれの子ですか」
 - ①この質問は、キリストの2性を教えるためのものである。
 - ②詩110：1は、キリストが神であり、人であることを教えている。
- (2) 「ダビデの子」という言葉は、キリストの人性を表している。
- (3) 「私の主」という言葉は、キリストの神性を表している。

(4) 今もユダヤ人たちは、この点に目が開かれていない。

(例話) 現代のメシアニックジューの信仰にも問題点がある。

(例話) モルモン教、エホバの証人も同じ問題を持っている。

(5) もしパリサイ人たちが「教えられやすい心」を持っていたなら、イエスを信じたことであろう。

(6) 議論に勝てなかった彼らは、ついに暴力に訴えるようになる。

(7) イエスを吟味した 4 番目の人（ひとりの律法学者）

①彼の心は開かれていた。

②それゆえ、「あなたは神の国から遠くない」と言ってもらえた。

③彼が救われたかどうかは、分からない。救われたと信じたい。

「パリサイ主義の糾弾（1）」

マコ 12：38～40、マタ 23：1～39、ルカ 20：45～47

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①イエスの最後の 1 週間について学んでいる。
- ②きょうの出来事も、火曜日に起こったものである。
- ③4 つのグループによる神の小羊の吟味は終了した。
- ④イエスの公生涯は、間もなく終了しようとしている。

＊パリサイ主義の糾弾

＊やもめの献金

- ⑤パリサイ主義に対するイエスのことばは、非常に厳しい。

＊パリサイ主義の墮落の度合いを思え。

＊イエスは軟弱なお方ではない。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 137 イエスは、最後の公の教会で、律法学者とパリサイ人たちを糾弾する。

マコ 12：38～40、マタ 23：1～39、ルカ 20：45～47

2. アウトライン

- (1) 群衆と弟子たちに向かって（1～12 節）
- (2) パリサイ人たちに向かって（13～36 節）
- (3) イエスの嘆きと再臨の預言（37～39 節）

＊今回は、(1) を取り上げる。

3. 結論：

- (1) 経札について
- (2) 着物のすその四隅のふさについて
- (3) 先生と呼ばれることについて

パリサイ主義の本質とは何かを学ぶ。

I. 群衆と弟子たちに向かって（1～12 節）

- 1. パリサイ人たちの教えの本質は、偽善である。

Mat 23:1 そのとき、イエスは群衆と弟子たちに話をして、

Mat 23:2 こう言われた。「律法学者、パリサイ人たちは、モーセの座を占めています。

Mat 23:3 ですから、彼らがあなたがたに言うことはみな、行い、守りなさい。けれども、彼らの行いをまねてはいけません。彼らは言うことは言うが、実行しないからです。

(1) 群衆と弟子たちに対する教えである。

- ①彼らは、イエスと指導者たちの論争に耳を傾けて来た。
- ②その彼らに、イエスはパリサイ主義の誤りを教える。

(2) 「モーセの座」 (写真参考)

- ①ガリラヤ湖の北のコラジンの会堂に置かれている（レプリカ）。
- ②「モーセの座」と書かれている。
- ③パリサイ人たちは、町の門のところに座り、争いごとを裁いていた。

(3) イエスは、パリサイ人たちの権威をある程度は認めた。

- ①彼らは、モーセの律法を教える権威を持っていた。
- ②それゆえ、彼らの教えることを守り行うべきである。
- ③ただし、その行いをまねてはいけない。

(4) パリサイ人たちの偽善とは。

- ①崇高な教え
- ②不従順な生活

2. パリサイ人たちは、口伝律法を作り、民衆に重荷を与える。

Mat 23:4 また、彼らは重い荷をくくって、人の肩に載せ、自分はそれに指一本さわろうとはしません。

(1) 本来の宗教的権威は、啓示されたみことばを土台とするものである。

- ①啓示されたみことばを忠実に教える範囲において、権威がともなう。
- ②みことばの解釈を恣意的に変更するなら、その人には権威はともなわない。

(2) パリサイ人たちは、解釈変更以上のことをした。

- ①恣意的に新しい律法を作り出した。口伝律法（ミシュナ）である。
- ②それを実行するように、民衆に要求した。
- ③しかし、自分のためには、抜け道を用意した。

3. パリサイ人たちは、利己主義と自己義認に満ちている。

Mat 23:5 彼らのしていることはみな、人に見せるためです。経札の幅を広くしたり、衣のふ

さを長くしたりするのもそうです。

(1) パリサイ人たちの行動の動機は、人に見せるためである。

①内面の実質ではなく、外面の評価にこだわる。

(2) 経札の幅を広くする。

①経札（テフィリン）には、額に付けるものと左腕に付けるものがある。

②不必要なほど大きい。

③中には、4箇所（箇所）の聖句が書かれ小さな羊皮紙が入っている。

*出 13 : 1～10、11～16、申 6 : 4～9、13～21

(4) 衣のふさを長くする。

①民 15 : 38 の命令

②着物のすその四隅にふさをつける。

4. パリサイ人たちは、自分を高く見せることを好む。

Mat 23:6 また、宴会の上座や会堂の上席が大好きで、

Mat 23:7 広場であいさつされたり、人から先生と呼ばれたりすることが好きです。

Mat 23:8 しかし、あなたがたは先生と呼ばれてはいけません。あなたがたの教師はただひとりしかなく、あなたがたはみな兄弟だからです。

Mat 23:9 あなたがたは地上のだれかを、われらの父と呼んではいけません。あなたがたの父はただひとり、すなわち天にいます父だけだからです。

Mat 23:10 また、師と呼ばれてはいけません。あなたがたの師はただひとり、キリストだからです。

Mat 23:11 あなたがたのうちの一番偉大な者は、あなたがたに仕える人でなければなりません。

Mat 23:12 だれでも、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされます。

(1) 宴会の上座や会堂の上席が大好き。

①ルカ 14 : 7

「招かれた人々が上座を選んでいる様子に気づいておられたイエスは、彼らにたとえを話された」

②自分が重要人物であることを誇示できる。

(2) 広場であいさつされるのが好き。

①マーケットプレイス。町で一番混雑している場所。

②公の場であいさるされると、エゴが満たされる。

(3) 自分を高く見せるタイトルを好む。

①先生（ラビ）

②われらの父

＊こう呼ばれる人は、生徒たちの上に権威を振う。

（例話）アラブ人の土産物屋で「Father」と呼ばれた経験

③師（導き手）

（例話）ミシュナの教え：父か師かの二者択一の場合、師を選ぶ。

(4) 唯一の師であるイエスの教え

①信者同士は、神を父とする兄弟たちである。

②人間の間に、上下関係があるわけではない。

③仕える者が一番偉大な者である。

④自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされる。

5. パリサイ主義は、長い祈りによって食欲を隠す。

Luk 20:47 また、やもめの家を食いつぶし、見えを飾るために長い祈りをします。こういう人たちは人一倍きびしい罰を受けるのです。」

(1) 経済的に苦しいやもめ

①やもめの保護は、モーセの律法の要請である。

②しかし、パリサイ人たちはやもめの財産を取り上げた。

＊高額の献金の要請

(2) 自らの食欲を隠すために、長い祈りをする。

①長い祈りが問題なのではなく、祈りの動機が問題である。

（例話）この決定をする前に祈ったと言いながら、やもめの家を抵当に取る。

②こういう人たちは、人一倍きびしい罰を受ける。

結論：

1. 経札について

「これをあなたの手の上のしるしとし、またあなたの額の上の記念としなさい。それは【主】のおしえがあなたの口にあるためであり、【主】が力強い御手で、あなたをエジプトから連れ出されたからである」（出 13：9）

「これを手の上のしるしとし、また、あなたの額の上の記章としなさい。それは【主】が

力強い御手によって、私たちをエジプトから連れ出されたからである」(出 13 : 16)

「これをするしとしてあなたの手に結びつけ、記章として額の上に置きなさい」(申 6 : 8)

「あなたがたは、私のこのことばを心とたましいに刻みつけ、これをするしとして手に結びつけ、記章として額の上に置きなさい」(申 11 : 18)

(1) ユダヤ人たちは、これらの命令を文字通り (機械的) に解釈した。

(2) (写真 3 枚)

①額に付ける経札の中は、4 つに仕切られている。

*それぞれの聖句が書かれた羊皮紙 4 枚を入れる。

②左腕に付ける経札の中は、仕切られていない。羊皮紙は 1 枚である。

*すべての聖句が書かれた羊皮紙 1 枚を入れる。

③超霊的に見えている限り、神の命令に従っているかどうかは気にしなかった。

(2) 字義通りの解釈は、著者の本来の意図を探り当てる解釈である。

①神の意図は、【主】の教えを常に意識し、それを生活原則とすることである。

2. 着物のすその四隅のふさについて

「【主】はモーセに告げて仰せられた。『イスラエル人に告げて、彼らが代々にわたり、着物のすその四隅にふさを作り、その隅のふさに青いひもをつけるように言え。そのふさはあなたがたのためであって、あなたがたがそれを見て、【主】のすべての命令を思い起こし、それを行うため、みだらなことをしてきた自分の心と目に従って歩まないようにするため、こうしてあなたがたが、わたしのすべての命令を思い起こして、これを行い、あなたがたの神の聖なるものとなるためである。わたしはあなたがたの神、【主】であって、わたしがあなたがたの神となるために、あなたがたをエジプトの地から連れ出したのである。わたしは、あなたがたの神、【主】である』」(民 15 : 37~41)

(1) (写真 1 枚)

(2) 特殊なデザインの衣服は、自分たちが特別な民であることを思い出させるためのものである。

①神を知らない民と同化しないで生きていくことが期待された。

②青いひもは、王の息子たちとしての身分を示すものである。

(3) パリサイ人たちは、本来の目的を忘れ、ふさを長くすることで満足した。

3. 先生と呼ばれることについて

(1) 禁じられた 3 つのタイトル

①先生 (ラビ)

②われらの父

③師 (カセイゲイテイス 導き手)

(2) 以上のタイトルは、神に対してのみ用いるべきものである。

①神の国においては、上下関係の区別はない。

②これは、靈的領域に関して言えることであって、拡大解釈すべきではない。

＊当時のラビと生徒の関係を背景に理解する必要がある。

(3) 家庭生活、職業生活、学校生活などにおいては、適用されない。

「あなたがたは、だれにでも義務を果たしなさい。みつぎを納めなければならない人にはみつぎを納め、税を納めなければならない人には税を納め、恐れなければならない人を恐れ、敬わなければならない人を敬いなさい」（ロマ 13：7）

①機械的解釈のこだわるなら、形式主義、律法主義の落とし穴に落ち込む。

(4) 律法のゴールは「2つの愛」であることを思い出そう。



モーセの座



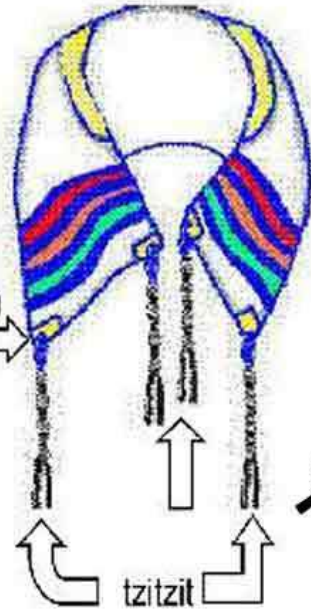
正統派ユダヤ人の
祈りの姿



ショール

Diadem- the crown of
the garment

カナフ ^{kanaph}
(鳥の翼)



ふさ

「パリサイ主義の糾弾（2）」

マコ 12：38～40、マタ 23：1～39、ルカ 20：45～47

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①イエスの最後の 1 週間について学んでいる。
- ②きょうの出来事も、火曜日に起こったものである。
- ③イエスの公生涯は、間もなく終了しようとしている。

＊パリサイ主義の糾弾

＊やもめの献金

- ④パリサイ主義に対するイエスのことばは、非常に厳しい。
- ⑤前回は、リーダーの見分け方について考えた。
- ⑥今回は、リーダーの自己吟味について考える。

＊「わざわざいだ」という言葉が 7 回出て来る。

＊14 節が欠けるギリシア語の底本がある（NIV の底本）。

＊それを含めれば、「わざわざいだ」は 8 回出て来る。

＊1 と 7 はともに「メシアの拒否」である。サイクルがつながってくる。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 137 イエスは、最後の公の教えで、律法学者とパリサイ人たちを糾弾する。

マコ 12：38～40、マタ 23：1～39、ルカ 20：45～47

2. アウトライン

- (1) 群衆と弟子たちに向かって（1～12 節）
- (2) パリサイ人たちに向かって（13～36 節）
- (3) イエスの嘆きと再臨の預言（37～39 節）

＊今回は、(2) を取り上げる。

3. 結論：

- (1) メシアの拒否
- (2) 的はずれの熱心さ
- (3) 優先順位の逆転
- (4) 八福の教え

パリサイ主義の本質とは何かを学ぶ。

Ⅱ. パリサイ人たちに向かって（13～36 節）

1. メシアの拒否

（1）13 節

Mat 23:13 わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは人々から天の御国をさえぎっているのです。自分も入らず、入ろうとしている人々をも入らせません。

①訳文の比較

- * 「わざわいだ」（新改訳）
- * 「不幸だ」（新共同訳）
- * 「わざわいである」（口語訳）
- * 「禍害(わざはひ)なるかな」（文語訳）
- * 「いまわしい人たちよ」（リビングバイブル）
- * 「Woe unto you」（KJV）
- * 「How terrible it will be for you,」（ISV）

②「わざわいだ」とは呪いの言葉ではない。

- * 神から見ると忌むべきものであることを示す言葉である。
- * 彼らの運命を悲しむ言葉である。

③「偽善の律法学者、パリサイ人」

- * 7つのわざわいの中で、「偽善」という言葉が6回出て来る。
- * 彼らは、イエスをメシアとして認めようとしない。
- * 自分が天の御国に入らないだけでなく、入ろうとしている人々も入らせない。
- * 民衆は、指導者たちの影響を受けていた（リーダーコンプレックス）。

2. 的外れの熱心さ

（1）15 節

Mat 23:15 わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは改宗者をひとりつくるのに、海と陸とを飛び回り、改宗者ができると、彼を自分より倍も悪いゲヘナの子にするのです。

①ひとりの人をラビ的ユダヤ教に改宗させるために、長距離を旅した。

- * 海路も陸路も旅した。

②その結果は何をもたらしたか。

- * ラビ的ユダヤ教への改宗者は、真理に目が閉ざされている。
- * 彼らは、パリサイ人たち以上にパリサイ的になる。
- * 「ゲヘナの子」とは、永遠の罰を受ける人のことである。

3. 優先順位の逆転

(1) 16～17 節

Mat 23:16 わざわいだ。目の見えぬ手引きども。おまえたちは言う。『だれでも、神殿をさして誓ったのなら、何でもない。しかし、神殿の黄金をさして誓ったら、その誓いを果たさなければならぬ。』

Mat 23:17 愚かで、目の見えぬ者たち。黄金と、黄金を聖いものにする神殿と、どちらがたいせつなのか。

①「わざわい」の1と2は、パリサイ人たちの悪影響がテーマであった。

②「わざわい」の3～7は、パリサイ人たちの内面がテーマである。

③彼らは、誓いの義務から解放されるための抜け道を作った。

*神殿をさして誓ったなら、その誓いは果たさなくてもよい。

*神殿の黄金をさして誓ったなら、その誓いを果たす必要がある。

*彼らは、神殿よりも黄金を重視した。

(2) 18～19 節

Mat 23:18 また、言う。『だれでも、祭壇をさして誓ったのなら、何でもない。しかし、祭壇の上の供え物をさして誓ったら、その誓いを果たさなければならぬ。』

Mat 23:19 目の見えぬ者たち。供え物と、その供え物を聖いものにする祭壇と、どちらがたいせつなのか。

①抜け道の別の例

*祭壇をさして誓ったなら、その誓いは果たさなくてもよい。

*祭壇の上の供え物をさして誓ったなら、その誓いを果たす必要がある。

*彼らは、祭壇よりも供え物を重視した。

(3) 20～22 節

Mat 23:20 だから、祭壇をさして誓う者は、祭壇をも、その上のすべての物をもさして誓っているのです。

Mat 23:21 また、神殿をさして誓う者は、神殿をも、その中に住まわれる方をもさして誓っているのです。

Mat 23:22 天をさして誓う者は、神の御座とそこに座しておられる方をさして誓うのです。

①祭壇や神殿に価値があるのは、そこに神が臨在しておられるからである。

②祭壇や神殿をさして誓うことは、神をさして誓うことである。

4. 実質のない儀式主義

(1) 23～24 節

Mat 23:23 わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは、はっか、いのんど、クミンなどの十分の一を納めているが、律法の中ではるかに重要なもの、正義とあわれみと誠実を、おろそかにしているのです。これこそしなければならぬことです。ただし、十分の一もおろそかにしてはいけません。

Mat 23:24 目の見えぬ手引きども。ぶよは、こして除くが、らくだは飲み込んでいます。

①イエスは、什一のささげ物を否定しているのではない。

②彼らの問題は、細部にこだわりすぎて、より重要な命令を無視していること。

*菜園で取れるはっか、いのんど（ディル）、クミンなどの十分の一

*正義とあわれみと誠実をおろそかにしている。

③彼らは、目の見えぬ手引きどもである。

*ぶよは、こして除くが、らくだは飲み込んでいます。

*「センスオブプロポーション」を失くしている。

5. 外面へのこだわり（1）

（1）25～26 節

Mat 23:25 わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは杯や皿の外側はきよめるが、その中は強奪と放縦でいっぱいです。

Mat 23:26 目の見えぬパリサイ人たち。まず、杯の内側をきよめなさい。そうすれば、外側もきよくなります。

①杯や皿の外側は、熱心にきよめる。

*パリサイ人や祭司たちは、石でできた食器を用いた。

*この行為は、自らの敬虔な姿を誇示するためのものである。

②まず、杯の内側（心の中）をきよめる必要がある。

*内面のきよめは、外面の行為に出て来る。

6. 外面へのこだわり（2）

（1）27～28 節

Mat 23:27 わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは白く塗った墓のようなものです。墓はその外側は美しく見えても、内側は、死人の骨や、あらゆる汚れたものがいっぱいです。

Mat 23:28 そのように、おまえたちも外側は人に正しく見えても、内側は偽善と不法でいっぱいです。

①白く塗った墓

*年に一度、墓は白く塗られた。誤って触れないために。

*外面はきれいであるが、内側には死人の骨や汚れたものが詰まっている。

②パリサイ人たちは、内側の偽善と不法を覆い隠している。

＊人の目には正しく見える。

＊神は、内側にあるものをご存じである。

7. メシアの拒否

(1) 29～32 節

Mat 23:29 わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは預言者の墓を建て、義人の記念碑を飾って、

Mat 23:30 『私たちが、父祖たちの時代に生きていたら、預言者たちの血を流すような仲間にはならなかっただろう』と言います。

Mat 23:31 こうして、預言者を殺した者たちの子孫だと、自分で証言しています。

Mat 23:32 おまえたちも父祖たちの罪の目盛りの不足分を満たしなさい。

①パリサイ人たちは、預言者の墓を立てたり、義人の記念碑を飾ったりしている。

②当時自分たちが生きていたなら、預言者たちを殺しはしなかったという。

③そういう彼らが、すでにイエスを殺すことを決めていた。

④イエスは、そのことを知っておられた。

(2) 33～36 節

Mat 23:33 おまえたち蛇ども、まむしのすえども。おまえたちは、ゲヘナの刑罰をどうしてのがれることができよう。

Mat 23:34 だから、わたしが預言者、知者、律法学者たちを遣わすと、おまえたちはそのうちのある者を殺し、十字架につけ、またある者を会堂でむち打ち、町から町へと迫害して行くのです。

Mat 23:35 それは、義人アベルの血からこのかた、神殿と祭壇との間で殺されたバラキヤの子ザカリヤの血に至るまで、地上で流されるすべての正しい血の報復がおまえたちの上に来るためです。

Mat 23:36 まことに、おまえたちに告げます。これらの報いはみな、この時代の上に来ます。

①彼らは、ゲヘナの刑罰を免れない。

②義人アベルは、最初の殉教者である（創4：8）。

③ゼカリヤは、最後の殉教者である（2歴24：20～22）。

④旧約聖書はイエス時代の約450年前に完成していた。

＊ユダヤ人たちは、そこに記された預言者たちのメシア預言を無視した。

＊アベルからゼカリヤまでとは、旧約聖書全体のことである。

⑤これらの報いは、「この時代」の上に来る。

＊イエスのメシア性を拒否した世代である。

＊紀元70年の神殿崩壊が、その成就である。

結論：

1. メシアの拒否

- (1) 自分では天の御国に入ろうとしない。
- (2) また、天の御国に入ろうとする人たちを妨害する。
- (3) 聖書知識が豊かで人格的にも優れた指導者が、福音を語らないことがある。
 - ①福音の三要素
 - ②生まれながらの人間は、神の恵みに反抗したくなる。
 - ③そして、他の人たちが神の恵みに応答することを妨害する。

2. 的はずれの熱心さ

- (1) ひとりの人を改宗させるために、長距離の移動を厭わない。
- (2) 改宗者を、自分よりもひどいパリサイ主義者にする。
- (3) 現代的例
 - ①何軒の戸別訪問を達成せよという教え
 - ②「イエスの御名によって」と何度も唱えよという教え

3. 優先順位の逆転

- (1) 神よりも金やいけにえを重視する。
- (2) 彼らは、霊的実質よりも物質に興味がある。
- (3) 彼らは、「目の見えぬ手引きども」である（16節）。
- (4) 現代的例
 - ①収入のほとんどすべてを巻き上げる。
 - ②聖餐式でぶどう酒を配らない。

4. 八福の教え

Mat 5:3 「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。

Mat 5:4 悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるから。

Mat 5:5 柔和な者は幸いです。その人たちは地を受け継ぐから。

Mat 5:6 義に飢え渴く者は幸いです。その人たちは満ち足りるから。

Mat 5:7 あわれみ深い者は幸いです。その人たちはあわれみを受けるから。

Mat 5:8 心のきよい者は幸いです。その人たちは神を見るから。

Mat 5:9 平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるから。

Mat 5:10 義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。

「パリサイ主義の糾弾(3)」

マコ 12 : 38～40、マタ 23 : 1～39、ルカ 20 : 45～47

「やもめの献金」

マコ 12 : 41～44、ルカ 21 : 1～4

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①イエスの最後の1週間について学んでいる。
- ②きょうの出来事も、火曜日に起こったものである。
- ③イエスの公生涯は、きょうの箇所ですべて終了する。
- ④パリサイ人たちに語った7つの「わざわい」の最後は、イエスの涙である。

*エルサレム崩壊の預言

- ⑤公生涯の締めくくりは、やもめの献金である。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 137 イエスは、最後の公の教えで、律法学者とパリサイ人たちを糾弾する。

マコ 12 : 38～40、マタ 23 : 1～39、ルカ 20 : 45～47

§ 138 やもめの献金

マコ 12 : 41～44、ルカ 21 : 1～4

2. アウトライン

(1) イエスの涙 (マタ 23 : 37～39)

- ①エルサレム崩壊の預言
- ②再臨の預言

(2) やもめの献金 (マコ 12 : 41～44)

- ①イエスの観察
- ②イエスの教え

3. 結論 :

- (1) 再臨と携挙の違い
- (2) 反ユダヤ主義の理由
- (3) やもめの献金からの教訓

神に喜ばれる信仰とは何かを学ぶ。

I. イエスの涙(37～39節)

1. エルサレム崩壊の預言

Mat 23:37 ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者。わたしは、めんどりがひなを翼の下に集めるように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。

Mat 23:38 見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。

(1) 「ああ、エルサレム、エルサレム」

①7つの「わざわいだ」の結末に来るのは、イエスの涙である。

* 「ああ、エルサレム、エルサレム」は、感情がこもった言葉である。

②エルサレムとは、エルサレムの住民でもあり、ユダヤ人全体でもある。

③イエスは、7つの「わざわいだ」の中で「目の見えぬ」という言葉を5回も使っている。

④彼らは、盲目の指導者に導かれ、誤った道に向かう悲劇の民である。

⑤彼らは、預言者たちを殺し、神からの使者を石打ちにしてきた民である。

(2) イエスは、その民を愛された。

①めんどりと雛の比喩が使われている。

②雛は、危険を察知すると、めんどりの翼の下に逃げて来る。

③イエスは、ユダヤ人たちに愛を示されたが、彼らは雛のようではなかった。

(3) 訳文の比較

「それなのに、あなたがたはそれを好まなかった」(新改訳)

「だが、お前たちは応じようとしなかった」(新共同訳)

「それなのに、おまえたちは応じようとしなかった」(口語訳)

「されど汝らは好まざりき」(文語訳)

「それなのに、あなたがたはそれを拒んでしまったのです」(リビングバイブル)

「and you would not!」(KJV)

「but you were unwilling!」(NIV)

(4) 訳文から見えて来ること

①ユダヤ人の盲目だけが、メシア拒否の原因ではない。

②「信じたくないから信じないんだ」という否定的な意志が感じられる。

③滅びの責任は、彼らにある。

(5) 「見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される」

- ①「家」とは、第一義的には神殿のことである。
- ②広い意味では、エルサレムの町、また、ユダヤ人国家も含むと考えられる。
- ③これは、メシアの死と再臨の間の期間に起こることの預言である。
- ④これは、紀元70年に成就した。

2. 再臨の預言

Mat 23:39 あなたがたに告げます。『祝福あれ。主の御名によって来られる方に』とあなたがたが言うときまで、あなたがたは今後決してわたしを見ることはありません。」

(1) イエスは、ユダヤ人たちを見捨てたのではない。

- ①イエスは、再び戻って来られる。
- ②しかし、再臨の時までは、ユダヤ人たちがイエスを見ることはない。
- ③復活のイエスに出会うのは、信者だけである。

(2) 再臨の条件

- ①「祝福あれ。主の御名によって来られる方に」という祈りである。
- ②これは、詩118:26にあるメシアを迎える時の公式な歓迎の言葉である。
- ③ユダヤ人たちが、この祈りをするのが再臨の条件である。

＊ユダヤ人たちが信仰を持ったことが暗示されている。

- ④盲目の指導者に導かれてメシアを拒否した民が、正しい指導者に導かれて信仰を告白するようになる。

II. やもめの献金(41～44節)

1. イエスの観察

Mar 12:41 それから、イエスは献金箱に向かってすわり、人々が献金箱へ金を投げ入れる様子を見ておられた。多くの金持ちが大金を投げ入れていた。

Mar 12:42 そこへひとりの貧しいやもめが来て、レプタ銅貨を二つ投げ入れた。それは一コドラントに当たる。

(1) 予備知識

- ①この出来事は、公生涯最後の出来事である。
- ②この箇所を最後に、イエスは神殿から離れる。
- ③パリサイ人やサドカイ人たちは、イエスの怒りを恐れイエスから離れている。
- ④弟子たちでさえも、イエスから距離を置いた所にいる。
- ⑤イエスは、異邦人の庭で教えていたが、ここで婦人の庭に入る。
- ⑥婦人の庭の一方の壁に、献金箱が置かれていた。

*13 個あった。それぞれ、目的が異なる献金箱であった。

*入り口が、ラッパの形をしていた。

*画像①

⑦婦人の庭に置かれた理由は、男女の区別なく献金ができるようにするため。

(2) 観察段階

①イエスは、献金箱が置かれている壁を正面に見る位置に座られた。

②過越の祭りにやって来た巡礼者たちが、どのような姿勢で献金を捧げるかを観察しておられた。

③多くの金持ちが大金を投げ入れていた。

④ひとりの貧しいやもめがレプタ銅貨 2 枚を投げ入れた。

*画像②

*レプタは、パレスチナで流通していた最小単位のユダヤの銅貨である。

*レプタ 2 枚は、ローマのデナリの 64 分の 1 である。

*1 デナリは当時の日当。仮に 1 万円とすると、レプタ 2 枚は 156 円である。

2. イエスの教え

Mar 12:43 すると、イエスは弟子たちを呼び寄せて、こう言われた。「まことに、あなたがたに告げます。この貧しいやもめは、献金箱に投げ入れていたどの人よりもたくさん投げ入れました。」

Mar 12:44 みなは、あり余る中から投げ入れたのに、この女は、乏しい中から、あるだけを全部、生活費の全部を投げ入れたからです。」

(1) これは、弟子たちへの教えである。

①弟子たちは距離を置いていたので、彼らを呼び寄せている。

②厳粛な教えである。

③人間による評価では、どれくらいの額を投げ入れたかで価値が決まる。

③イエスによる評価では、どれくらいの犠牲を払ったかで価値が決まる。

④このやもめは、生活費の全部を投げ入れた。

(2) やもめのための心配

①将来への備えはどうなったのか。

(例話) その日の夕食にありつけたか。

②これは、信仰に基づく行為である。

③神は必要を満たしてください。

*ユダヤ人の会堂では、やもめに対する援助が行われていた。

*初代教会は、その習慣を踏襲した(使6:1~4参照)。

結論：

1. 再臨と携挙の違い

(1) 再臨の条件は、ユダヤ人の民族的回心である。

(2) **ゼカ 12:10**

「わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと哀願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見、ひとり子を失って嘆くように、その者のために嘆き、初子を失って激しく泣くように、その者のために激しく泣く」

①ユダヤ人にとっては、ひとり子を失くす悲しみ以上の悲しみはない。

②ユダヤ人の回心は、大患難時代の最後に起こる。

(3) 大患難時代→ユダヤ人の民族的回心→メシアの再臨→千年王国

(4) 携挙には、前提条件がない。

①紀元70年のエルサレム崩壊以降、携挙はいつでも起こりうる状態となった。

②携挙とは、普遍的教会が天に上げられることである。

2. 反ユダヤ主義の理由

(1) 歴史上、反ユダヤ主義が途絶えたことはない。

①最近では、民族的な反ユダヤ主義から政治的反ユダヤ主義に移行している。

(2) 反ユダヤ主義の最大の目的は、霊的なものである。

①ユダヤ人がイエスを信じる前に、彼らを抹殺するというのがそれである。

②ユダヤ人がいなくなれば、メシアの再臨もなくなる。

③背後で指揮をしているのは、サタンである。

3. やもめの献金からの教訓

(1) ここには、パリサイ人たちとやもめの信仰の対比がある。

①イエスは神殿の中で初めて小さな光を見た。

②このやもめは、イエスを信じる者が見習うべき手本である。

(2) ここには、全的献身の姿がある。

①口伝律法では、慈善のための献金は2レプタ以上とされていたが、ここではその規定は適用されない。

②つまり、彼女は1レプタだけ捧げる道もあったのが、全部を捧げた。

③弟子たちの全的献身が試されようとしている。

④**マコ 14:27~31**

Mar 14:27 イエスは、弟子たちに言われた。「あなたがたはみな、つまずきます。『わたしが羊飼いを打つ。すると、羊は散り散りになる』と書いてありますから。

Mar 14:28 しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先に、ガリラヤへ行きます。」

Mar 14:29 すると、ペテロがイエスに言った。「たとい全部の者がつまずいても、私はつまずきません。」

Mar 14:30 イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。あなたは、きょう、今夜、鶏が二度鳴く前に、わたしを知らないとは三度言います。」

Mar 14:31 ペテロは力を込めて言い張った。「たとい、ごいっしょに死ななければならないとしても、私は、あなたを知らないなどとは決して申しません。」みなのももそう言った。

(3) ここには、イエスの全面的な自己犠牲の予表がある。

献金箱



ひとりの貧しいやもめがレプタ銅貨
2枚を投げ入れた。(イメージ写真)



「オリーブ山での説教（1）」

マコ 13：1～37、マタ 24、25、ルカ 21：5～36

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①A. T. ロバートソンの調和表は、新しい区分に入る（XII）。

②イエスの公生涯は終わった。

③イエスは神殿を去り、オリーブ山に座る。

④そこで、弟子たちに「オリーブ山での説教」を語る。

⑤非常に難解な内容である。

＊共観福音書のそれぞれの著者が、異なった読者を想定して書いている。

＊それらすべてを並行して読む必要がある。

＊紀元 1 世紀のユダヤ教の用語が出て来るので、難解である。

＊特に、終末論的用語が問題である。

⑥この箇所でも、火曜日が続いている。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 139 イエスはオリーブ山に座り、終末的出来事に関して弟子たちに教える。

マコ 13：1～37、マタ 24、25、ルカ 21：5～36

2. アウトライン

(1) 説教が生まれた歴史的背景

(2) 3つの質問

(3) 回答①：世の終わりのしるし

(4) 回答②：エルサレム崩壊のしるし

(5) 回答③：再臨のしるし

(今回は、(1) ～ (3) を取り上げる)

3. 結論：

(1) メシアの3つの役割

(2) 偽キリスト

(3) 戦争

オリーブ山での説教を通して、終末論について学ぶ。

I. 説教が生まれた歴史的背景（1～2 節）

1. 1 節

Mat 24:1 イエスが宮を出て行かれるとき、弟子たちが近寄って来て、イエスに宮の建物をさし示した。

(1) イエスは、神殿を去って行かれる。

①イエスの公生涯は終わった。

②弟子たちが近寄ってきて、神殿のすばらしさを口にする。

(2) マコ 13 : 1

「イエスが、宮から出て行かれるとき、弟子のひとりがイエスに言った。『先生。これはまあ、何とみごとな石でしょう。何とすばらしい建物でしょう』」

(3) 神殿の石は、3～3.5 メートル、重量は 8～10 トンもある。

①壁に使用される石は、それよりも大きい。

②現在の西壁は、神殿域を支える壁の西側の部分である。

2. 2 節

Mat 24:2 そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「このすべての物に目をみはっているのでしょう。まことに、あなたがたに告げます。ここでは、石がくずされずに、積まれたまま残ることは決してありません。」

(1) 当時、神殿はまだ工事中であった。

①前 20 年にヘロデ大王によって拡張工事が始められた。

②紀元 64 年に完成した（84 年かかった）。

③イエスが神殿を去ったのは、紀元 30 年である。

④神殿は、紀元 70 年に滅びる（弟子たちは知らない）。

(2) イエスの預言は、文字通り成就した。

①ローマの将軍ティトゥスは、兵士たちに神殿を破壊しないように命じていた。

②しかし、ひとりの兵士がたいまつを神殿に投げ込み、内部が焼失した。

③内壁を覆っていた金が溶け出し、石と石の隙間に流れ込んだ。

④後日、それを取り出すために、石が取りのけられた。

II. 3つの質問（3 節）

1. 3 節

Mat 24:3 イエスがオリーブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとに来て言った。「お話してください。いつ、そのようなことが起こるのでしょうか。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか。」

(1) マコ 13 : 3

「イエスがオリーブ山で宮に向かってすわっておられると、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレが、ひそかにイエスに質問した」

①ペテロとアンデレ、ヤコブとヨハネという 2 組の兄弟が質問した。

②イエスの教えは、この 4 人の内弟子に対する個人レッスンである。

(2) 彼らは、3 つの質問をした。

①「いつ、そのようなことが起こるのでしょうか」

＊エルサレム崩壊のしるしは何か。

②「あなたが来られる時には、どんな前兆があるのでしょうか」

＊再臨のしるしは何か。

③「世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか」

＊世の終わりのしるしは何か。

(3) イエスの回答は、質問の順番とは異なる。

③世の終わりのしるしは何か。

①エルサレム崩壊のしるしは何か。

②再臨のしるしは何か。

(4) 「世の終わり」という言葉について

①「the end of the world」(KJV)、「the end of the age」(ISV)

②ギリシア語は、「アイオーン」である。

③当時のユダヤ人たちは、2 つの「時代」を認識していた。

＊「今いる時代」と「メシア的時代」（メシア到来後の時代）

Ⅲ. 回答①：世の終わりのしるし（4～8 節）

1. 4～6 節

Mat 24:4 そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「人に惑わされないように気をつけなさい。

Mat 24:5 わたしの名を名のる者が大ぜい現れ、『私こそキリストだ』と言って、多くの人を惑わすでしょう。

Mat 24:6 また、戦争のことや、戦争のうわさを聞くでしょうが、気をつけて、あわてないようにしなさい。これらは必ず起こることです。しかし、終わりが来たものではありません。

(1) 世の終わりのしるしではないことが 2 つある。

- ①これは、教会時代の特徴である。
- ②惑わされてはならない。

(2) 偽キリストの出現

- ①ユダヤ人の歴史上、最初にメシア宣言をしたのはイエスである。
- ②次に、バル・コクバが出た（紀元 132 年）。
*彼は、偽キリストの最初の人物となった。

(3) 戦争の勃発

- ①「戦争のことや、戦争のうわさ」とは、地域戦争のことである。
- ②終末に関係しているのは、世界戦争である。
- ③教会時代を通じて、戦争は起こり続ける。
- ④これらのことは、終わりが来たというしるしではない。

2. 7～8 節

Mat 24:7 民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起こります。

Mat 24:8 しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです。

(1) ここで、世の終わりのしるしについて語られる。

(2) 世界戦争、飢饉、地震

- ①「民族は民族に、国は国に敵対して」というのは、世界戦争のことである。
*当時のラビ用語である。

②飢饉と地震は、世界中に広がっている。

③ルカ 21 : 11

「大地震があり、方々に疫病やききんが起こり、恐ろしいことや天からのすさまじい前兆が現れます」

*疫病、恐ろしいこと、天からのすさまじい前兆

④「そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです」

*今の世が終わり新しい世になるための陣痛の初めである。

*メシア的王国が出現する前の苦しみを「陣痛」と呼ぶのはラビ的用語。

結論：

1. メシアの3つの役割

- (1) メシアは、預言者、祭司、王としての役割を持つ。
 - ①この3つの職責への任命は、油注ぎによって行われる。
 - ②メシアとは、油注がれた者という意味である。
- (2) イエスは、オリーブ山での説教で、預言者としての使命を終える。
- (3) イエスの大祭司としての使命は、最後の晩餐の席ですでに始まっている。
 - ①昇天されたイエスは、父なる神の右の座に座し、大祭司として信者のために執り成しをしておられる。
- (4) メシアは、王として再臨される。

2. 偽キリスト

- (1) シャブタイ・ツビ（1626～76年）
 - ①トルコのイズミール出身
 - ②メシア宣言を行い、ユダヤ人を聖地に帰還させると誓った。
 - ③彼を信じて財産を処分し、聖地に向かった人々が出た。
 - ④彼はトルコ軍に捕まり、幽閉後にイスラム教に改宗した。
- (2) ジェイコブ・フランク（1726～91年）
 - ①ポーランド出身のユダヤ人
 - ②シャブタイ・ツビの生まれ変わりと称して、メシア宣言を行った。
 - ③トーラーを否定し、秘義として性的儀式を行った。
- (3) メナヘム・シュネルソン（1902～1994年）
 - ①ニューヨーク出身のラビ
 - ②ルバビッチ派の多くの人々が、今でもシュネルソンをメシアと信じている。
- (4) 異邦人の中からも偽キリストが出ている。
 - ①文鮮明
 - ②ニューエイジ運動
 - *特定のグルをメシアとする。
 - *「キリスト意識」の教え

3. 戦争

- (1) 第一次世界大戦（1914～18年）
 - ①人類史上初の世界戦争である。
 - ②その結果、シオニズム運動が生まれた。

(2) 第二次世界大戦（1939～45 年）

①第一次世界大戦の継続形

②その結果、イスラエル国家が誕生した（1948 年）。

③紀元 70 年に国が滅びて以来のことである。

④これで、ユダヤ人たちが「祝福あれ。主の御名によって来られる方に」と祈る環境が整った。

⑤100 年前には、聖書学者のほとんどがイスラエル回復の預言を比喩的に解釈していた。

「オリーブ山での説教（2）」

マコ 13：1～37、マタ 24、25、ルカ 21：5～36

（朗読箇所 ルカ 21：12～24）

1. はじめに

（1）文脈の確認

- ① A. T. ロバートソンの調和表は、新しい区分に入る（XII）。
- ② イエスの公生涯は終わった。
- ③ イエスは神殿を去り、オリーブ山に座る。
- ④ そこで、弟子たちに「オリーブ山での説教」を語る。
- ⑤ 非常に難解な内容である。
- ⑥ この箇所でも、火曜日が続いている。

（2）A. T. ロバートソンの調和表

§ 139 イエスはオリーブ山に座り、終末的出来事に関して弟子たちに教える。

マコ 13：1～37、マタ 24、25、ルカ 21：5～36

（3）弟子たちの質問

- ① 「いつ、そのようなことが起こるのでしょうか」
*エルサレム崩壊のしるしは何か。
- ② 「あなたが来られる時には、どんな前兆があるのでしょうか」
*再臨のしるしは何か。
- ③ 「世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか」
*世の終わりのしるしは何か。

（4）イエスの回答は、③、①、②の順番である。

2. アウトライン

- （1）説教が生まれた歴史的背景
- （2）3つの質問
- （3）回答①：世の終わりのしるし
- （4）回答②：エルサレム崩壊のしるし
- （5）回答③：再臨のしるし
- （今回は、（3）の後半と（4）を取り上げる）

3. 結論：

- (1) 異邦人の時（ルカ 21：24）
- (2) 異邦人の富（ロマ 11：12）
- (3) 異邦人の完成のなる時（ロマ 11：25）

オリーブ山での説教を通して、終末論について学ぶ。

Ⅲ. 回答①の後半：世の終わりのしるしの前に起こること（12～19 節）

1. 12 節

Luk 21:12 しかし、これらのすべてのことの前に、人々はあなたがたを捕らえて迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために、あなたがたを王たちや総督たちの前に引き出すでしょう。

(1) 「これらすべてのことの前に」

①世の終わりのしるしが現れる前に、使徒たちは種々のことを経験する。

(2) 彼らは迫害に会う。

- ①ユダヤ人共同体からの迫害
- ②異邦人の支配者たちからの迫害

2. 13～15 節

Luk 21:13 それはあなたがたのあかしをする機会となります。

Luk 21:14 それで、どう弁明するかは、あらかじめ考えないことに、心を定めておきなさい。

Luk 21:15 どんな反対者も、反論もできず、反証もできないようなことばと知恵を、わたしがあなたがたに与えます。

(1) 迫害が証しする機会となる。

①事実は、宣教は迫害によって拡大して行くことになる。

(2) 事前に証しの内容を準備する必要はない。

- ①法廷での尋問に答える言葉は、聖霊によって与えられる。
- ②彼らの証しに反論できる者はいない。

3. 16～17 節

Luk 21:16 しかしあなたがたは、両親、兄弟、親族、友人たちにまで裏切られます。中には殺される者もあり、

Luk 21:17 わたしの名のために、みなの方に憎まれます。

(1) 家族関係が破壊される。

①家族に裏切られる者も出る。

(2) 殉教の死を遂げる者も出る。

①11 人の使徒たちの中で 10 人まで殉教の死を遂げる。

(3) 福音のために、隣人から憎まれる。

「この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢いをもって、世界中で、実を結び広がり続けています。福音はそうにしてあなたがたに届いたのです」（コロ 1：6）

4. 18～19 節

Luk 21:18 しかし、あなたがたの髪の毛一筋も失われることはありません。

Luk 21:19 あなたがたは、忍耐によって、自分のいのちを勝ち取ることができます。

(1) 霊的守りが保証されている。

①信仰による忍耐を示すことで、霊的に救われていることが証明される。

IV. 回答②：エルサレム崩壊のしるし（20～24 節）

1. 20 節

Luk 21:20 しかし、エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、そのときには、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。

(1) エルサレムがローマ軍によって包囲されることが、崩壊のしるしである。

①ユダヤ戦争とは、66 年から 74 年まで行われたユダヤ人による対ローマ戦争。

②74 年は、マサダが陥落した年である。

(2) この預言が成就した歴史的経緯

①66 年 ユダヤ総督フロルスが神殿の宝物を持ち出した。

＊これによってユダヤ人の反乱が勃発した。

②同年 シリア属州の総督ガルスが軍団を率いて鎮圧に向かうも、敗れてしまう。

③67 年 ネロは將軍ヴェスパシアヌスに 3 個軍団を与えてユダヤに派遣する。

＊ヴェスパシアヌスは、息子ティトゥスとともに進軍する。

＊ガリラヤを攻略し、エルサレムに向かう。

＊ユダヤ人武将のヨセフスの投降。「ユダヤ戦記」の著者。

- ④同年 ヴェスパシアヌス率いるローマ軍はエルサレムを包囲する。
- ⑤68 年 4 月 ガリア・ルグドゥネンシス属州総督ウィンデクスによる反乱
- ⑥同年 6 月 ネロが自殺。
- ⑦69 年 4 人のローマ人が次々と皇帝に即位（4 皇帝の年）。
 - *ゲルマニアで反乱が勃発し、ローマは大混乱に陥った。
- ⑧ウェスパシアヌスはエルサレム包囲網を解き、ローマに帰国する。
- ⑨69 年 12 月 ヴェスパシアヌスが皇帝に即位。
 - *息子のティトゥスを将軍としてエルサレムに向かわせた。
- ⑩70 年 エルサレム陥落
 - *フォロ・ロマーノに残るティトゥスの凱旋門（写真 3 点）
 - *82 年建設 高さ 15.4 メートル、幅 13.5 メートル、奥行き 4.75 メートル
- ⑪73 年（あるいは 74 年） マサダ陥落

2. 21～22 節

Luk 21:21 そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。都の中にいる人々は、そこから立ちのきなさい。いなかにいる者たちは、都に入ってははいけません。

Luk 21:22 これは、書かれているすべてのことが成就する報復の日だからです。

- (1) ヴェスパシアヌスが帰国した際に、包囲網が解かれた。
 - ①エルサレムを逃れるチャンスはこの時しかない。
- (2) メシアニックジューたちは、イエスの教えをよく記憶していた。
 - ①約 2 万人のメシアニックジューがエルサレムから逃れた。
 - ②それ以外の地から 8 万人のメシアニックジューが合流した。
 - ③彼らは、ガリラヤ地方のペラという町に逃亡した（デカポリスのひとつ）。

3. 23～24 節

Luk 21:23 その日、哀れなのは身重の女と乳飲み子を持つ女です。この地に大きな苦難が臨み、この民に御怒りが臨むからです。

Luk 21:24 人々は、剣の刃に倒れ、捕虜となってあらゆる国に連れて行かれ、異邦人の時の終わるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます。

- (1) 70 年に 110 万人のユダヤ人が滅びたと言われている。
 - ①メシアニックジューたちは、この裁きを免れた。
 - ②その結果、メシアニックジューと他のユダヤ人たちの間に亀裂が生じた。
- (2) 「異邦人の時の終わるまで」

①「異邦人の時」とは、異邦人がエルサレムを支配している期間を指す言葉。

結論：

1. 異邦人の時

「人々は、剣の刃に倒れ、捕虜となってあらゆる国に連れて行かれ、異邦人の時の終わるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます」（ルカ 21：24）

- (1) 「the times of the Gentiles」（複数形）
- (2) 異邦人がエルサレムを支配している期間
- (3) ソロモンの神殿がバビロン軍によって破壊された時から始まった（前 586）。
 - ①ダビデの子孫がエルサレムで王位に就くことがなくなった。
- (4) 第一神殿と第二神殿時代の崩壊は、同じ日に起こったとされている。
 - ①ティシャ・ベ・アヴ（アヴの月 9 日）
 - ②現在の 7 月から 8 月
 - ③ユダヤ人にとっては、神の裁きと嘆きを思い出す日である。
- (5) メシアが王として再臨される時が、異邦人の時の終わりである。
 - ①今も異邦人の時は続いている。
 - ②大患難時代においても異邦人の時は続いている。

2. 異邦人の富

「もし彼らの違反が世界の富となり、彼らの失敗が異邦人の富となるのなら、彼らの完成は、それ以上の、どんなにかすばらしいものを、もたらすことでしょう」（ロマ 11：12）

- (1) 「the riches of the Gentiles」
- (2) 福音に敵対したユダヤ人は、一時的に祝福を失った。
- (3) 信仰のある異邦人は、多くの祝福を神から受けた。

3. 異邦人の完成のなる時

「兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知っていただきたい。それは、あなたがたが自分で自分を賢いと思うことがないようにするためです。その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時までであり、こうして、イスラエルはみな救われる、ということです」（ロマ 11：25～26a）

- (1) 「the fullness of the Gentiles」
- (2) 「異邦人全体が救いに達するまで」（新共同訳）
- (3) 「異邦人が全部救われるに至る時まで」（口語訳）
- (4) これは、携挙の時を指している。

ティトゥスの凱旋門とレプリカ



「オリーブ山での説教（3）」

マコ 13：1～37、マタ 24、25、ルカ 21：5～36

（朗読箇所 マタ 24：9～14）

1. はじめに

（1）文脈の確認

- ①イエスの公生涯は終わった。
- ②イエスは神殿を去り、オリーブ山に座る。
- ③そこで、弟子たちに「オリーブ山での説教」を語る。
- ④福音書の中で終末論がまとまって取り上げられている箇所である。
- ⑤この箇所でも、火曜日が続いている。

（2）A. T. ロバートソンの調和表

§ 139 イエスはオリーブ山に座り、終末的出来事に関して弟子たちに教える。

マコ 13：1～37、マタ 24、25、ルカ 21：5～36

（3）弟子たちの質問

- ①「いつ、そのようなことが起こるのでしょうか」
*エルサレム崩壊のしるしは何か。
- ②「あなたが来られる時には、どんな前兆があるのでしょうか」
*再臨のしるしは何か。
- ③「世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか」
*世の終わりのしるしは何か。

（4）イエスの回答は、③、①、②の順番である。

- ①イエスは、再臨の前に起こることについて預言する。
- ②マタ 24：9～14 は、大患難時代の前半（3 年半）に関する預言である。

2. アウトライン

- （1）説教が生まれた歴史的背景
- （2）3 つの質問
- （3）回答①：世の終わりのしるし
- （4）回答②：エルサレム崩壊のしるし
- （5）回答③：再臨のしるし
- （今回は、（5）を取り上げる。大患難時代の前半に起こること）

3. 結論：

- (1) 迫害の勃発と「第5の封印」
- (2) 偽預言者たちの出現と「ゼカリヤの預言」
- (3) 罪の増加と「不法の秘密」
- (4) 大患難時代を生き延びるユダヤ人たちと「ゼカリヤの預言」
- (5) 世界宣教と「144,000人のユダヤ人たち」

オリーブ山での説教を通して、終末論について学ぶ。

V. 回答③：再臨のしるし

1. 迫害の勃発（9～10節）

Mat 24:9 そのとき、人々は、あなたがたを苦しいめに会わせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。

Mat 24:10 また、そのときは、人々が大ぜいつまづき、互いに裏切り、憎み合います。

(1) 「そのとき」

- ① 「τότε」 (ギリシア語)
- ② 「Then」 (英語)
- ③ 「それから」 (現代訳)
- ④ 9節から大患難時代の記述に入る。

(2) 聖徒たちに対する迫害が起こり、多くの者が殉教の死を遂げる。

- ① 世界の諸国が、聖徒たちを迫害する。

(3) 多くの者が、迫害を逃れようとして、信仰から離れる。

- ① 家族同士でも、相手を密告し、憎み合う。

2. 偽預言者たちの出現（11節）

Mat 24:11 また、にせ預言者が多く起こって、多くの人々を惑わします。

(1) 偽預言者と偽キリストは違う。

「わたしの名を名のる者が大ぜい現れ、『私こそキリストだ』と言って、多くの人を惑わすでしょう」 (マタ 24:5)

(2) 偽預言者の特徴

- ① 彼らは、自分たちが神を代弁する者であると主張する。

②彼らの預言は成就しない。

③彼らは、人々を真の神から遠ざける。

(3) 大患難時代は、基本的にはユダヤ人の苦しみの時である。

「しかし、イスラエルの中には、にせ預言者も出ました。同じように、あなたがたの中にも、にせ教師が現れるようになります。彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込み、自分たちを買い取ってくださった主を否定するようなことさえして、自分たちの身にすみやかな滅びを招いています」(2 ペテ 2 : 1)

①偽預言者は、イスラエルを欺く者たちである。

②偽教師は、教会を欺く者たちである。

3. 罪の増加 (12 節)

Mat 24:12 不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。

(1) 罪が増加し、人々は愛に反する行いをするようになる。

①罪の広がりや抑制する者がいなくなるから。

4. 大患難時代を生き延びるユダヤ人たち (13 節)

Mat 24:13 しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。

(1) 大患難時代を生き延びたユダヤ人たちは、民族的救いを経験するようになる。

①生き延びたから救われるという意味ではない。

②救いは常に恵みと信仰による。

③信仰の内容は、「福音の三要素」である。

5. 世界宣教 (14 節)

Mat 24:14 この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます。

(1) 大患難時代の前半の 3 年半の間に、世界宣教が行われる。

①迫害はあるが、希望もあるのである。

結論：

1. 迫害の勃発と第 5 の封印

(1) 迫害の勃発は、第 5 の封印と関係している (黙 6 : 9~11)。

「小羊が第五の封印を解いたとき、私は、神のことばと、自分たちが立てたあかしとのために殺された人々のたましいが祭壇の下にいるのを見た」(黙 6 : 9)

(2) 7つの封印は、前半の4つと後半の3つに二分されている。

①第5の封印は、後半の最初の封印である。

②天での様子に場面が転換し、殉教者の魂が天の祭壇の下にいる。

③教会（真の信者たち）は、大患難時代の前に携挙されている。

2. 偽預言者たちの出現とゼカリヤの預言

(1) ゼカ 13 : 1～2

「その日、ダビデの家とエルサレムの住民のために、罪と汚れをきよめる一つの泉が開かれる。その日、——万軍の【主】の御告げ——わたしは、偶像の名をこの国から断ち滅ぼす。その名はもう覚えられない。わたしはまた、その預言者たちと汚れの霊をこの国から除く」

(2) 終わりの日におけるエルサレムの状態が描写されている。

3. 罪の増加と「不法の秘密」

(1) 2テサ 2 : 6～7

「あなたがたが知っているとおりに、彼がその定められた時に現れるようにと、いま引き止めているものがあるのです。不法の秘密はすでに働いています。しかし今は引き止める者があって、自分を取り除かれる時まで引き止めているのです」

(2) 「不法の秘密」とは何か。

①「秘密」とは、「ミステリー（ムステイリオン）」である。

②今まで隠されていたが、新約時代になって新しく啓示された真理

③「不法」が終末時代にどのようなになるかが啓示された。

④その内容が、「不法の秘密」である。

⑤それはまだ成就していないが、すでに働いている。

⑥しかし、「引き止める者」があるので、その程度は制限されている。

(3) 「引き止める者」とは何か。

①聖霊のことである。

②聖霊は教会を通して働く。

③教会が携挙されると、聖霊も地上から上げられる。

④大患難時代は、聖霊も教会も地上にいない時代である。

4. 大患難時代を生き延びるユダヤ人たちとゼカリヤの預言

(1) ゼカ 13 : 8~9

「全地はこうなる。——【主】の御告げ——その三分の二は断たれ、死に絶え、三分の一がそこに残る。わたしは、その三分の一を火の中に入れ、銀を練るように彼らを練り、金をためすように彼らをためす。彼らはわたしの名を呼び、わたしは彼らに答える。わたしは『これはわたしの民』と言い、彼らは『【主】は私の神』と言う」

(2) 3 分の 1 のユダヤ人が、大患難時代を生き延びる。

①患難によって精錬された結果、彼らは真の神に立ち帰る。

5. 世界宣教と 144,000 人のユダヤ人たち

(1) 黙 7 : 4

「それから私が、印を押された人々の数を聞くと、イスラエルの子孫のあらゆる部族の者が印を押されていて、十四万四千人であった」

(2) 黙 7 章

①第 6 の封印と第 7 の封印の間に入る挿入句のような章である。

②その内容は、大患難時代の前半を通して起こることである。

③大患難時代の主要な目的は、世界大のリバイバルをもたらすことである。

④黙 7 章は、そのリバイバルについて解説している。

⑤印を押された 144,000 人のユダヤ人が登場する。

⑥彼らは、反キリストによる迫害から守られている。

⑦短時間で世界宣教を行うために、ユダヤ人たちが用いられる。

「オリーブ山での説教（4）」

マコ 13：1～37、マタ 24、25、ルカ 21：5～36

（朗読箇所 マタ 24：15～28）

1. はじめに

（1）文脈の確認

- ①イエスの公生涯は終わった。
- ②イエスは神殿を去り、オリーブ山に座る。
- ③そこで、弟子たちに「オリーブ山での説教」を語る。
- ④福音書の中で終末論がまとまって取り上げられている箇所である。

（2）A. T. ロバートソンの調和表

§ 139 イエスはオリーブ山に座り、終末的出来事に関して弟子たちに教える。

マコ 13：1～37、マタ 24、25、ルカ 21：5～36

（3）弟子たちの質問

- ①「いつ、そのようなことが起こるのでしょうか」
*エルサレム崩壊のしるしは何か。
- ②「あなたが来られる時には、どんな前兆があるのでしょうか」
*再臨のしるしは何か。
- ③「世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか」
*世の終わりのしるしは何か。

（4）イエスの回答は、③、①、②の順番である。

①今回は、②の「再臨のしるし」について学ぶ。

*マタ 24：9～14 は、大患難時代の前半（3年半）に関する預言である。

*マタ 24：15～28 は、大患難時代の後半（3年半）に関する預言である。

2. アウトライン

- （1）「荒らす憎むべき者」の出現（15 節）
- （2）山への逃避（16～21 節）
- （3）限定された日数（22 節）
- （4）偽キリストと偽預言者の出現（23～27 節）
- （5）再臨の場所（28 節）

3. 結論：これまでの復習

オリーブ山での説教を通して、終末論について学ぶ。

V. 回答③：再臨のしるし（大患難時代の後半の3年半）

1. 「荒らす憎むべき者」の出現（15節）

Mat 24:15 それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす憎むべき者』が、聖なる所に立つのを見たならば、（読者はよく読み取るように。）

(1) 「荒らす憎むべき者」の出現が、大患難時代が後半に入るしるしである。

- ①「読者はよく読み取るように」
- ②その意味を知るためには、ダニエル書の預言から学ぶようにという意味である。
- ③「荒らす憎むべき者」の出現は、2段階で起こる。

(2) ダニ 9：27

Dan 9:27 彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物とをやめさせる。荒らす忌むべき者が翼に現れる。ついに、定められた絶滅が、荒らす者の上にふりかかる。」

- ①反キリストはイスラエルと7年間の契約（平和条約）を結ぶ。
- ②3年半が経った時点で、彼は条約を破棄する。
- ③レビ的祭儀を止めさせる。
 - *大患難時代の後半に入る時点では、第3神殿が建っている。
- ④反キリストは至聖所に座り、自らを神だと宣言する。
 - *2テサ2：3～4 参照
- ⑤反キリストを礼拝しない者は、殺される。
- ⑥しかし、反キリストは最後に滅ぼされる。

(3) 黙 13：14～15

Rev 13:14 また、あの獣の前で行うことを許されたしるしをもって地上に住む人々を惑わし、剣の傷を受けながらもなお生き返ったあの獣の像を造るように、地上に住む人々に命じた。

Rev 13:15 それから、その獣の像に息を吹き込んで、獣の像がもの言うことさえもできるようにし、また、その獣の像を拝まない者をみな殺させた。

- ①偽預言者が、反キリストの像を至聖所に置き、それを拝むように命じる。
- ②その像に息を吹き込み、ものが言えるようにした。
- ③像を拝まない者は、殺された。

2. 山への逃避（16～21 節）

（1）警告

Mat 24:16 そのときは、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。

Mat 24:17 屋上にいる者は家の中の物を持ち出そうと下に降りてはいけません。

Mat 24:18 畑にいる者は着物を取りに戻ってはいけません。

①「荒らす憎むべき者」の出現は、ユダヤ人にとっては「しるし」である。

②ユダヤ人たちは、大急ぎで逃げる必要がある。

③「山」（複数形）とは、ヨルダン川東岸の山地である。

④持ち物に固執して、時間を無駄にしてはならない。

（2）予想される困難

Mat 24:19 だがその日、哀れなのは身重の女と乳飲み子を持つ女です。

Mat 24:20 ただ、あなたがたの逃げるのが、冬や安息日にならぬよう祈りなさい。

Mat 24:21 そのときには、世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような、ひどい苦難があるからです。

①身重の女と乳飲み子を持つ女は、哀れである。

②冬に逃げるのは、辛いことである（雨季に当たる）。

③安息日に逃げるのも、辛いことである（移動手段がなくなる）。

④後にも先にも、このような苦難はない。

3. 限定された日数（22 節）

Mat 24:22 もし、その日数が少なくされなかったら、ひとりとして救われる者はないでしょう。しかし、選ばれた者のために、その日数は少なくされます。

（1）患難の日数は、突如断ち切られる。

①そうでなければ、救われる者はひとりもいなくなる。

②ダニ 9：27 によれば、それは半週（3 年半）の間続く。

*3 年半=1260 日

（2）ダニ 12：11～12

Dan 12:11 常供のささげ物が取り除かれ、荒らす忌むべきものが据えられる時から千二百九十日がある。

Dan 12:12 幸いなことよ。忍んで待ち、千三百三十五日に達する者は。

①1335 日－1260 日 ＝ 75 日

②大患難時代が終わってからメシア的王国と設立されるまでの期間

③患難の日数が限られているのは、迫害を受ける者には大きな励ましとなる。

4. 偽キリストと偽預言者の出現（23～27 節）

（1）23～24 節

Mat 24:23 そのとき、『そら、キリストがここにいる』とか、『そこにいる』とか言う者があっても、信じてはいけません。

Mat 24:24 にせキリスト、にせ預言者たちが現れて、できれば選民をも惑わそうとして、大きなしるしや不思議なことをして見せます。

①キリストが密かに再臨されたという噂を信じてはならない。

＊真剣に再臨を待っている者ほど、騙されやすい。

②偽キリストや偽教師たちに惑わされてはならない。

＊その方法は、大きなしるしや不思議である。

＊しるしや不思議は、必ずしも神からのものとは言えない。

③2テサ2：9～10

2Th 2:9 不法の人の到来は、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、

2Th 2:10 また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行われます。なぜなら、彼らは救われるために真理への愛を受け入れなかったからです。

（2）25～27 節

Mat 24:25 さあ、わたしは、あなたがたに前もって話しました。

Mat 24:26 だから、たとい、『そら、荒野にいらっしゃる』と言っても、飛び出して行ってはいけません。『そら、へやにいらっしゃる』と聞いても、信じてはいけません。

Mat 24:27 人の子の来るのは、いなくまが東から出て、西にひらめくように、ちょうどそのように来るのです。

①ユダヤ人たちは、隠れている山地から飛び出して行ってはならない。

②メシアの再臨は、誰もが認識できる形で起こる。

③「いなくまが東から出て、西にひらめくように」

＊突然、見逃すことのないような形で起こる。

5. 再臨の場所（28 節）

Mat 24:28 死体のある所には、はげたかが集まります。

（1）同じ表現が、ルカ17：37に出ている。

Luk 17:37 弟子たちは答えて言った。「主よ。どこですか。」主は言われた。「死体のある所、そこに、はげたかも集まります。」

（2）イスラエルの民は、異邦人の軍勢に取り囲まれる。

- ①「死体」とは、山地に隠れているイスラエルの民である。
- ②「はげたか」とは、異邦人の軍勢である。
- ③その場所は、ボツラ（現在のヨルダンにあるペトラ）である。

(3) ミカ 2 : 12～13

Mic 2:12 ヤコブよ。／わたしはあなたをことごとく必ず集める。／わたしはイスラエルの残りの者を必ず集める。／わたしは彼らを、おりの中の羊のように、／牧場の中の群れのように一つに集める。／こうして人々のざわめきが起ころう。

Mic 2:13 打ち破る者は、／彼らの先頭に立って上って行き、／彼らは門を打ち破って進んで行き、／そこを出て行く。／彼らの王は彼らの前を進み、／【主】が彼らの真っ先に進まれる。

- ①「おりの中の羊」→「ボツラの羊」（文語訳）

(4) イザ 34 : 5～6

Isa 34:5 天ではわたしの剣に血がしみ込んでいる。／見よ。これがエドムの上に下り、／わたしが聖絶すると定めた民の上に下るからだ。

Isa 34:6 【主】の剣は血で満ち、脂肪で肥えている。／子羊ややぎの血と、／雄羊の腎臓の脂肪で肥えている。／【主】がボツラでいけにえをほふり、／エドムの地で大虐殺をされるからだ。

(5) イザ 63 : 1～2

Isa 63:1 「エドムから来る者、／ボツラから深紅の衣を着て来るこの者は、だれか。／その着物には威光があり、／大いなる力をもって進んで来るこの者は。」／「正義を語り、／救うに力強い者、それがわたしだ。」

Isa 63:2 「なぜ、あなたの着物は赤く、／あなたの衣は酒ぶねを踏む者のようなのか。」

(6) 黙 12 : 6

Rev 12:6 女は荒野に逃げた。そこには、千二百六十日の間彼女を養うために、神によって備えられた場所があった。

(7) その他の聖句

- ①エレ 49 : 13～14、22
- ②ハバ 3 : 3
- ③ゼカ 14 : 3～5

結論：はじめに

- (1) メシアの3つの役割（預言者、祭司、王）
- (2) オリーブ山での説教で、イエスの預言者としての使命が終わる。
- (3) 祭司としての使命は、最後の晩餐の席ですでに始まっている。
- (4) メシアは、王として再臨される。

1. 回答①：世の終わりのしるし

- (1) 世の終わりのしるしではないもの
 - ①偽キリストの出現
 - ②戦争の勃発
 - ③これらは、教会時代の特徴である。
- (2) 世の終わりのしるし
 - ①世界戦争、飢饉、地震
 - ②「そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです」
 - ③今の世が終わり、新しい世になるための陣痛の初めである。

2. 回答②：エルサレム崩壊のしるし

- (1) エルサレムがローマ軍に包囲されることが、崩壊のしるしである。
 - ①ユダヤ人たちは、山（複数形）へ逃げた。ヨルダン川東岸のペラという町。
- (2) 紀元70年にエルサレムは滅びた。
- (3) エルサレムは、「異邦人の時が終わるまで」異邦人に踏み荒らされる。
 - ①バビロン捕囚以降、今に至るまで、異邦人の時は続いている。

3. 回答③：メシア再臨のしるし

- (1) 大患難時代の前半
 - ①迫害の勃発
 - ②偽預言者たちの出現
 - ③罪の増加
 - ④大患難時代を生き延びるユダヤ人たちの存在（3分の1）
 - ⑤世界宣教（144,000人のユダヤ人たち）
- (2) 大患難時代の後半
 - ①「荒らす憎むべき者」の出現（15節）
 - ②山への逃避（16～21節）
 - ③限定された日数（22節）
 - ④偽キリストと偽預言者の出現（23～27節）
 - ⑤再臨の場所（28節）

「オリーブ山での説教（5）」

マコ 13 : 1～37、マタ 24、25、ルカ 21 : 5～36

（朗読箇所 マタ 24 : 29～42）

1. はじめに

（1）文脈の確認

- ①イエスはオリーブ山に座り、弟子たちに「オリーブ山での説教」を語る。
- ②福音書の中で終末論がまとまって取り上げられている箇所である。
- ③エルサレムの崩壊、大患難時代、携挙、再臨、メシア的王国（千年王国）

（2）A. T. ロバートソンの調和表

§ 139 イエスはオリーブ山に座り、終末的出来事に関して弟子たちに教える。

マコ 13 : 1～37、マタ 24、25、ルカ 21 : 5～36

（3）弟子たちの質問

- ①「いつ、そのようなことが起こるのでしょうか」
*エルサレム崩壊のしるしは何か。
- ②「あなたが来られる時には、どんな前兆があるのでしょうか」
*再臨のしるしは何か。
- ③「世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか」
*世の終わりのしるしは何か。

（4）イエスの回答は、③、①、②の順番である。

- ①今私たちは、②の「再臨のしるし」について学んでいる。
*マタ 24 : 9～28 で、大患難時代について 2 回に分けて学んだ。
- ②今回はその続きで、再臨、イスラエルの回復、携挙などについて学ぶ。

2. アウトライン

- （1）再臨のしるし（29～30 節）
- （2）イスラエルの回復（31 節）
- （3）いちじくの木のとえ（32～35 節）
- （4）携挙（36～42 節）

3. 結論：これまでの復習

- （1）終末論の流れ

(2) 大患難時代を逃れる道

オリーブ山での説教を通して、終末論について学ぶ。

V. 回答③：再臨のしるし

1. 再臨のしるし（29～30 節）

(1) 29 節

Mat 24:29 **だが、これらの日の苦難に続いてすぐに、太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は天から落ち、天の万象は揺り動かされます。**

①大患難時代の最後に起こることが預言されている。

②再臨のしるしは、天体の異変である。

③太陽、月、星は光を放たなくなる。

*「星は天から落ち」は、星が光を放たなくなるという意味であろう。

④これらの言葉は、字義通りに解釈すべきである。

*イエスが十字架にかかった時に、全地は暗くなった。

⑤ヨエ 2：30～31

Joe 2:30 わたしは天と地に、不思議なしるしを現す。／血と火と煙の柱である。

Joe 2:31 **【主】の大いなる恐るべき日が来る前に、／太陽はやみとなり、月は血に変わる。**

⑥海が荒れるので、人々は恐怖に襲われる（ルカ 21：25～26）。

(2) 30 節

Mat 24:30 **そのとき、人の子のしるしが天に現れます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るのです。**

①「人の子のしるし」とは、シャカイナグローリーである。

②シャカイナグローリーが暗闇をかき消す。

③初臨の際にもシャカイナグローリーが輝いた。

*再臨のしるしとなるシャカイナグローリーの方が、規模が大きい。

④地上のすべての国民が、メシアの再臨を目撃する。

*未信者にとっては、悲しみの時となる。

⑤ダニ 7：13

Dan 7:13 私がまた、夜の幻を見てみると、／見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、／年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。

2. イスラエルの回復（31 節）

Mat 24:31 **人の子は大きなラッパの響きとともに、御使いたちを遣わします。すると御使い**

私たちは、天の果てから果てまで、四方からその選びの民を集めます。

①イスラエルは約束の地に集められる。

②イスラエルの回復に関する旧約聖書の預言を1節にまとめたもの。

③イザ 27：12～13

Isa 27:12 その日、／【主】はユーフラテス川からエジプト川までの／穀物の穂を打ち落とされる。／イスラエルの子らよ。／あなたがたは、ひとりひとり拾い上げられる。

Isa 27:13 その日、大きな角笛が鳴り渡り、／アッシリヤの地に失われていた者や、／エジプトの地に散らされていた者たちが来て、／エルサレムの聖なる山で、【主】を礼拝する。

＊角笛（ラッパ）が鳴り渡る。

④マコ 13：27

Mar 13:27 そのとき、人の子は、御使いたちを送り、地の果てから天の果てまで、四方からその選びの民を集めます。

＊「地の果て」から集められてくるのは、大患難時代を生き延びたユダヤ人。

・彼らは、大患難時代の間に迫害のために世界各地に散らされている。

＊「天の果て」から集められてくるのは、旧約時代の聖徒たち。

＊生きているユダヤ人と復活したユダヤ人が、ともにメシア的王国に住む。

3. いちじくの木のとえ（32～35 節）

（1）32～33 節

Mat 24:32 いちじくの木から、たとえを学びなさい。枝が柔らかになって、葉が出て来ると、夏の近いことがわかります。

Mat 24:33 そのように、これらのことのすべてを見たら、あなたがたは、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。

①いちじくの木は、この文脈ではイスラエルのことではない。

＊「いちじくの木や、すべての木を見なさい」（ルカ 21：29）

＊葉が出て来ると、夏が近いことが分かる。

②「これらのことのすべてを見たら」とは、マタ 24：4～28 の内容である。

＊つまり、大患難時代のことである。

＊この預言はまだ成就していない。

③ユダヤ人たちにとって重要なのは、「荒らす憎むべき者」の出現である。

④それから再臨までは3年半である。

（2）34～35 節

Mat 24:34 まことに、あなたがたに告げます。これらのことが全部起こってしまうまでは、この時代は過ぎ去りません。

Mat 24:35 この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。

- ①イエスのこのことばは、イエスと同時代のユダヤ人に対するものではない。
 - *彼らは不信仰な世代であり、御国は彼らから取り去られた（マタ 21:43）。
 - *彼らもまた神の裁きを経験する。
- ②イエスのことばは、大患難時代を通過するユダヤ人への励ましである。
 - *大患難時代の後半は 3 年半であることが分かるので、忍耐できる。
- ③イエスのことばは、信用できる。

4. 携挙（36～42 節）

（1）36 節

Mat 24:36 ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。

- ①「ただし」（but, however）は、ギリシア語で「peri de」である。
- ②これは、話題を変える時の言葉である。
- ③パウロは、コリント人への手紙第一でこれを多用している。
 - *「さて、〇〇についてですが」
- ④この聖句から、別のテーマに移行している。携挙というテーマである。
- ⑤携挙が大患難時代の後に起こるということではない。
 - *イエスは、出来事を時間順に教えているわけではない。
- ⑥携挙の時は、誰も知らない。
- ⑦再臨の時は、分かる。
 - *反キリストとイスラエルが契約を結んでから 7 年後
 - *「荒らす憎むべき者」が現れてから 3 年半後

（2）37～39 節

Mat 24:37 人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のようなからです。

Mat 24:38 洪水前の日々は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は、飲んだり、食べたり、めとったり、とついだりしていました。

Mat 24:39 そして、洪水が来てすべての物をさらってしまうまで、彼らはわからなかったのです。人の子が来るのも、そのとおりです。

- ①携挙は突然起こる。
- ②ノアの洪水が来る直前の状況が例に上げられる。
 - *人々は、なんの疑いもなく日常生活を送っていた。
- ③携挙も、人々がなんの疑いもなく日常生活を送っている時にやって来る。

④メシアの再臨は、大患難時代の後にやって来る。これが大きな違いである。

(3) 40～42 節

Mat 24:40 そのとき、畑にふたりいると、ひとりを取られ、ひとりが残されます。

Mat 24:41 ふたりの女が臼をひいていると、ひとりを取られ、ひとりが残されます。

Mat 24:42 だから、目をさましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られるか、知らないからです。

①信者と未信者が分離される。

②信者は天に上げられ、未信者は地上に残される。

③地上に残された者は、大患難時代を通過する。

④「目をさましていなさい」とは、教会時代の信者に対する勧めである。

結論：

1. 終末論の流れ

(1) エルサレムの崩壊

(2) 世の終わりのしるし

①世界戦争、飢饉、地震

②「そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです」

(3) 携挙

(4) 大患難時代

①前半の 3 年半

②後半の 3 年半

(5) 再臨

①直前に天変地異が起こる。

②メシアはシャカイナグローリーとともに来られる。

③イスラエルは約束の地に回復される。

(6) 千年王国

2. 大患難時代を逃れる道

(1) ルカ 21：35～36

Luk 21:35 その日は、全地の表に住むすべての人に臨むからです。

Luk 21:36 しかし、あなたがたは、やがて起ころうとしているこれらすべてのことからのがれ、人の子の前に立つことができるように、いつも油断せずに祈っていなさい。」

(2) 「その日」とは、大患難時代のことである。

- ①地上のすべての人がそれを経験する。
- ②不信仰に対する裁きである。
- (3) しかし、大患難時代を逃れることは可能である。
 - ①救いを得たものは、人の子の前に立つことができる。
 - ②救いは、信仰と恵みによって与えられる。
 - ③信仰の内容は、「福音の三要素」である。

「オリーブ山での説教（6）」

マコ 13：1～37、マタ 24、25、ルカ 21：5～36

（朗読箇所 マタ 25：1～13、31～46）

1. はじめに

（1）文脈の確認

- ①イエスはオリーブ山に座り、弟子たちに「オリーブ山での説教」を語る。
- ②福音書の中で終末論がまとまって取り上げられている箇所である。
- ③エルサレムの崩壊、携挙、大患難時代、再臨、メシア的王国（千年王国）

（2）A. T. ロバートソンの調和表

§ 139 イエスはオリーブ山に座り、終末的出来事に関して弟子たちに教える。

マコ 13：1～37、マタ 24、25、ルカ 21：5～36

（3）目をさまし、勤勉に労することを勧めるたとえ話が 5 つ語られる。

- ①主人の帰りを待つ門番（マコ 13：33）
- ②泥棒に備える家の主人（マタ 24：43～44）
- ③忠実なしもべと悪いしもべ（マタ 24：45～51）
- ④花婿を出迎える 10 人の娘たち（マタ 25：1～13）
- ⑤タラント（マタ 25：14～30）

*きょうは、④のたとえ話を取り上げる。

（4）さらに、マタ 25：31～46にある「異邦人の裁き」を取り上げる。

2. アウトライン

- （1）花婿を出迎える 10 人の娘たち（1～13 節）
- （2）異邦人の裁き（31～46 節）

3. 結論：誤解を解く

- （1）花婿を出迎える 10 人の娘たち（1～13 節）
- （2）異邦人の裁き（31～46 節）
- （3）まとめ

オリーブ山での説教を通して、終末論について学ぶ。

V. 回答③：再臨のしるし

1. 花婿を出迎える 10 人の娘たち（1～13 節）

(1) ユダヤ式結婚式における 4 段階

①婚約の段階

- *花嫁の父と花婿の父が合意する。
- *花婿の父が花嫁の父に花嫁料を払う。
- *結婚式まで、最低 1 年の婚約期間を置く。
- *父なる神は、花嫁（教会）のために御子の血によって花嫁料を払った。

②花嫁を迎えに行く段階

- *花婿が花嫁の家まで出向き、花嫁のために整えた家に彼女を連れ帰る。
- *イエスは花嫁（教会）を出迎え、天に連れ帰る。

***ヨハ 14：3**

Joh 14:3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしの
もとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。

③結婚式の段階

- *結婚式に招かれる人は、少数である。
- *イエスの地上再臨の前に、天において小羊の婚姻が行われる。

***黙 19：6～8**

Rev 19:6 また、私は大群衆の声、大水の音、激しい雷鳴のようなものが、こう言うのを聞いた。
／「ハレルヤ。万物の支配者である、われらの神である主は王となられた。

Rev 19:7 私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。小羊の婚姻の時が来て、花嫁はその用意
ができたのだから。

Rev 19:8 花嫁は、光り輝く、きよい麻布の衣を着ることを許された。その麻布とは、聖徒た
ちの正しい行いである。」

④婚宴の段階

- *婚宴には、多くの人たちが招かれる。
- *当時の婚宴は、7 日間続いた。
- *教会の婚宴は、地上再臨の後、メシア的王国で行われる。

(2) このたとえ話は、第 2 段階に関するものである。

- ①花婿が花嫁を連れて戻ってくる。
- ②花婿の町に住む人たちは、花婿がいつ戻って来るか分からない。
- ③そこで、乙女たちが見張りに立つ。時には、何日も続くことがある。
- ④夜になるかもしれないので、ともしびを用意していた。
- ⑤花婿と花嫁を迎えたなら、次は 7 日間の婚宴に参加する。

(3) 1～4 節

Mat 25:1 そこで、天の御国は、たとえて言えば、それぞれがともしびを持って、花婿を出迎える十人の娘のようです。

Mat 25:2 そのうち五人は愚かで、五人は賢かった。

Mat 25:3 愚かな娘たちは、ともしびは持っていたが、油を用意しておかなかった。

Mat 25:4 賢い娘たちは、自分のともしびといっしょに、入れ物に油を入れて持っていた。

①10 人の娘たちは、花嫁ではない。

②彼女たちは、花婿が花嫁を伴って帰って来るのを見張っている。

③5 人は愚かで、5 人は賢かった。

④ともに、ともしびを持っていた。

⑤しかし、油を用意しているかどうかの差があった。

(4) 5～10 節

Mat 25:5 花婿が来るのが遅れたので、みな、うとうとして眠り始めた。

Mat 25:6 ところが、夜中になって、『そら、花婿だ。迎えに出よ』と叫ぶ声がした。

Mat 25:7 娘たちは、みな起きて、自分のともしびを整えた。

Mat 25:8 ところが愚かな娘たちは、賢い娘たちに言った。『油を少し私たちに分けてください。私たちのともしびは消えそうです。』

Mat 25:9 しかし、賢い娘たちは答えて言った。『いいえ、あなたがたに分けてあげるにはとうてい足りません。それよりも店に行って、自分のをお買いなさい。』

Mat 25:10 そこで、買いに行くと、その間に花婿が来た。用意のできていた娘たちは、彼といっしょに婚礼の祝宴に行き、戸がしめられた。

①油は聖霊の象徴である。

②油を持っているかどうかの差は、信者であるか未信者であるかの差である。

③自分の油を他人に分けてあげることはいできない。

④救いは、各人が自分の決心によって得るものである。

⑤賢い娘たちは、婚宴に参加することができた。

(5) 11～13 節

Mat 25:11 そのあとで、ほかの娘たちも来て、『ご主人さま、ご主人さま、あけてください』と言った。

Mat 25:12 しかし、彼は答えて、『確かなところ、私はあなたがたを知りません』と言った。

Mat 25:13 だから、目をさましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないからです。

- ①愚かな娘たちは、締め出された。
- ②花婿と愚かな娘たちの間には、なんの関係もなかった。
- ③このたとえ話は、目を覚まして、用心深く生きることを勧めている。
- ④このたとえ話は、キリストが教会とともに地上に再臨される時の話である。
- ⑤その時油を用意している娘たちは、携挙以降に救われた人たちである。
- ⑥彼らは、メシアの地上再臨の後に催される祝宴に招かれる。

2. 異邦人の裁き（31～46 節）

（1）ヨエ 3：1～3

Joe 3:1 見よ。わたしがユダとエルサレムの／繁栄を元どおりにする、その日、その時、

Joe 3:2 わたしはすべての国民を集め、／彼らをヨシャパテの谷に連れ下り、その所で、／彼らがわたしの民、／わたしのゆずりの地イスラエルにしたことで／彼らをさばく。／彼らはわたしの民を諸国の民の間に散らし、／わたしの地を自分たちの間で分け取ったからだ。

Joe 3:3 彼らはわたしの民をくじ引きにし、／子どもを遊女のために与え、／酒のために少女を売って飲んだ。

- ①これは、再臨の後に起こる異邦人の裁きについての預言である。
- ②裁きが行われる場所は、ヨシャパテの谷である。
- ③裁きの基準は、ユダヤ人をどのように扱ったかである。

＊親ユダヤか反ユダヤか

（2）31～33 節

Mat 25:31 人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき、人の子はその栄光の位に着きます。

Mat 25:32 そして、すべての国々の民が、その御前に集められます。彼は、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け、

Mat 25:33 羊を自分の右に、山羊を左に置きます。

- ①再臨のメシアの前に、すべての国々の民（異邦人）が集められる。
- ②彼らは、大患難時代を生き延びた異邦人たちである。
- ③そこで、羊と山羊のより分けが行われる。

（3）34～36 節

Mat 25:34 そうして、王は、その右にいる者たちに言います。『さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。』

Mat 25:35 あなたがたは、わたしが空腹であったとき、わたしに食べる物を与え、わたしが渴いていたとき、わたしに飲ませ、わたしが旅人であったとき、わたしに宿を貸し、

Mat 25:36 わたしが裸のとき、わたしに着る物を与え、わたしが病気をしたとき、わたしを見舞い、わたしが牢にいたとき、わたしをたずねてくれたからです。』

- ①羊は親ユダヤの異邦人である。
- ②彼らは、反ユダヤ主義が蔓延する世界にあつて、ユダヤ人たちに愛を示した。
- ③イエスは、ユダヤ人のことを「わたし」と言っている。
- ④イエスにとっては、ユダヤ人伝道は重大なテーマである。

(4) 37～40 節

Mat 25:37 すると、その正しい人たちは、答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹なのを見て、食べる物を差し上げ、渴いておられるのを見て、飲ませてあげましたか。

Mat 25:38 いつ、あなたが旅をしておられるときに、泊まらせてあげ、裸なのを見て、着る物を差し上げましたか。

Mat 25:39 また、いつ、私たちは、あなたのご病気やあなたが牢におられるのを見て、おたずねしましたか。』

Mat 25:40 すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。』

- ①羊の異邦人たち（正しい人たち）には、王のことばの意味が分からない。
- ②王は、ユダヤ人を「わたしの兄弟たち」と呼んでいる。
 - *イエスは、肉体的にはユダヤ人である。
- ③ユダヤ人にしたことは、イエスにしたことになる。

(5) 41～46 節

Mat 25:41 それから、王はまた、その左にいる者たちに言います。『のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火に入れ。

Mat 25:42 おまえたちは、わたしが空腹であったとき、食べる物をくれず、渴いていたときにも飲ませず、

Mat 25:43 わたしが旅人であったときにも泊まらせず、裸であったときにも着る物をくれず、病気のときや牢にいたときにもたずねてくれなかった。』

Mat 25:44 そのとき、彼らも答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹であり、渴き、旅をし、裸であり、病気をし、牢におられるのを見て、お世話をしなかったのでしょうか。』

Mat 25:45 すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、おまえたちに告げます。おまえたちが、この最も小さい者たちのひとりにしなかったのは、わたしにしなかったのです。』

Mat 25:46 こうして、この人たちは永遠の刑罰に入り、正しい人たちは永遠のいのちに入る

のです。」

- ①山羊は反ユダヤの異邦人である。
- ②彼らは、反キリストに従い、ユダヤ人抹殺計画に参加した。
- ③彼らは、メシア的王国から除外され、燃える火の池に投げ込まれる。

結論：誤解を解く

(1) 花婿を出迎える10人の娘たち

- ①テーマは携挙ではなく、地上再臨である。
- ②携挙に与る条件は聖霊に満たされていること、というのは誤解である。
- ③このたとえ話は、大患難時代を生き延びた人々に関するものである。
- ④油は聖霊の象徴である。
- ⑤油を持っているかどうかの違いは、救われているかどうかの違いである。
- ⑥携挙の後に信仰を持った人は、メシア的王国に入ることができる。
- ⑦信仰のない人は、メシア的王国から締め出される。

(2) 異邦人の裁き

- ①白い御座の裁きではない（黙20：13～15）。
- ②この裁きは、メシアの地上再臨の直後に起こる。
- ③異邦人全員が、個人的に裁かれる。
- ④メシア的王国に入る資格があるかどうかを判定するための裁きである。
- ⑤羊の異邦人は、大患難時代に親ユダヤであった異邦人である。
- ⑥山羊の異邦人は、大患難時代に反ユダヤであった異邦人である。
- ⑦羊の異邦人はメシア的王国に入り、山羊の異邦人は永遠の滅びに入る。
- ⑧これは、行いによる救いを教えたものではない。
 - *信仰によって救われた異邦人は、親ユダヤ的行動を起こす。
 - *救われていない異邦人は、反ユダヤ的行動を起こす。

(3) まとめ

- ①携挙への備え、大患難時代への備え、地上再臨への備えが語られた。
- ②最後に、メシア的王国の設立と、そこに入るための資格が語られた。
 - *大患難時代にも救いのチャンスはある。
- ③オリーブ山の説教は、あらゆる時代の人たちに対する適用を持っている。
- ④目を覚ましていること、注意深く生きること、勤勉に主の業に励んでいること。

「ベタニヤでの出来事」

(1) 「十字架の予告」 マコ 14 : 1～2、マタ 26 : 1～5、ルカ 22 : 1～2

(2) 「埋葬の準備」 マコ 14 : 3～9、マタ 26 : 6～13、ヨハ 12 : 2～8

(朗読箇所 マタ 26 : 1～5、ヨハ 12 : 2～8)

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① 「オリーブ山での説教」6 回が終わった。
- ② きょうの箇所で、火曜日が終わる。
- ③ 日没後は水曜日である。
- ④ ここから 2 日後に、過越の祭りとなる。
- ⑤ 水曜日は休息の日。木曜日は過越の祭りの準備の日、金曜日は十字架の日。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 140 イエスは十字架の死を予告する。

マコ 14 : 1～2、マタ 26 : 1～5、ルカ 22 : 1～2

§ 141 ベタニヤのマリアがイエスの埋葬のために香油を注ぐ。

マコ 14 : 3～9、マタ 26 : 6～13、ヨハ 12 : 2～8

2. アウトライン

(1) 十字架の予告 (マタ 26 : 1～5)

- ① イエスによる十字架の死の予告 (1～2 節)
- ② ユダヤ人の指導者たちの陰謀 (3～5 節)

(2) 埋葬の準備 (ヨハ 12 : 2～8)

- ① マリアの行為 (2～3 節)
- ② 弟子たちの反応 (4～6 節)
- ③ イエスの教え (7～8 節)

3. 結論 :

- (1) イスラエルの祭りとメシアの生涯
- (2) 4 組の登場人物たち
- (3) マリアの信仰

イエスを取り巻く人々の動きから、信仰の本質について学ぶ。

I. 十字架の予告 (マタ 26 : 1～5)

1. イエスによる十字架の死の予告（1～2 節）

（1）1 節

Mat 26:1 イエスは、これらの話をすべて終えると、弟子たちに言われた。

①「これらの話をすべて終えると」

＊これは、オリーブ山での説教が終わったということ。

②マタイの福音書で、この表現は5回出て来る（7:28、11:1、13:53、19:1）。

③いずれも、イエスの公生涯のターニングポイントとなっている。

④この場面では、十字架の予告が始まる。

（2）2 節

Mat 26:2 「あなたがたの知っているとおり、二日たつと過越の祭りになります。人の子は十字架につけられるために引き渡されます。」

①過越の祭りは2日後に迫っていた。

②マコ 14:1

「さて、過越の祭りと種なしパンの祝いが二日後に迫っていたので、祭司長、律法学者たちは、どうしたらイエスをだまして捕らえ、殺すことができるだろうか、とけんめいであった」

③本来は、過越の祭りは1日の祭り、種なしパンの祭りは7日間の祭り。

④イエス時代には、両者が合体して8日間の祭りとなっていた。

⑤今もユダヤ人たちは、8日間の祭りを祝う。

⑥ニサンの月の14日（この年は木曜日）に小羊をほふり食事の準備をする。

⑦過越の食事は、日没後、つまり15日（この年は金曜日）に食する。

（3）イエスによる十字架の予告

①これは、4度目の十字架の予告である（マタ 16:21、17:23、20:18）。

②ここでイエスは、十字架の日を特定された。

③弟子たちは、その意味を理解することができなかった。

④弟子たちにとっては、十字架刑は想像すらできないことであった。

2. ユダヤ人の指導者たちの陰謀（3～5 節）

（1）3～4 節

Mat 26:3 そのころ、祭司長、民の長老たちは、カヤパという大祭司の家の庭に集まり、

Mat 26:4 イエスをだまして捕らえ、殺そうと相談した。

①祭司長（サドカイ派）、律法学者（パリサイ派）、民の長老たち

②大祭司カヤパ（サドカイ派、サンヘドリンのリーダー）の屋敷に集まった。

- ③ユダヤ人の指導者たちは、イエスを捕えて殺すことで意見の一致を見ていた。
- ④有罪判決の前に殺すことを決めるのは、律法違反である。
- ⑤律法の守護者であるべき人たちが、率先して律法を破っていた。

(2) 5 節

Mat 26:5 しかし、彼らは、「祭りの間はいけない。民衆の騒ぎが起こるといけないから」と話していた。

①指導者たちの 2 つのゴール

*民衆が見ていないところでイエスを逮捕する。

*過越の祭りの時にイエスを殺すことは避ける。

- ②彼らは、民衆の暴動を極度に恐れた。
- ③ユダヤ総督は、祭りの期間カイザリヤからエルサレムに上り駐在した。
- ④より多くの兵士が配置され、監視体制が敷かれた。
- ⑤サドカイ派は親ローマであり、現状維持派である。

(3) 神のゴール

- ①メシアは過越の祭りで死ぬ。
- ②メシアは十字架にかかって死ぬ。

③イザ 53 : 5

「しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた」

④詩 22 : 11～18

「どうか、遠く離れないでください。苦しみが近づいており、助ける者がいないのです。…彼らは私をながめ、私を見ています。彼らは私の着物を互いに分け合い、私の一つの着物を、くじ引きにします」

(4) 過越の祭りは、メシアの死の預言的枠組みである。

- ①もしそうでないなら、イエスはいつ逮捕されてもよかったことになる。

II. 埋葬の準備（ヨハ 12 : 2～8）

1. マリアの行為（2～3 節）

(1) 2 節

Joh 12:2 人々はイエスのために、そこに晩餐を用意した。そしてマルタは給仕していた。ラ

ザロは、イエスとともに食卓に着いている人々の中に混じっていた。

①ベタニヤのツァラアトに冒された人シモンの家（マタ 26 : 6）。

＊恐らく、イエスによって癒された人であろう。

＊今も病んでいるなら、村に住めない。

＊ましてや、多数の人との会食などは許されないことである。

②マルタが給仕していた。

③ラザロは、食卓に着いている人々の中に混じっていた。

④マルタの一家はシモンと近い関係にあったのだろう。

(2) 3 節

Joh 12:3 マリヤは、非常に高価な、純粋なナルドの香油三百グラムを取って、イエスの足に塗り、彼女の髪の毛でイエスの足をぬぐった。家は香油のかおりでいっぱいになった。

①マリアは純粋なナルドの香油をイエスに注いだ。

＊頭と足に香油を注ぎ、それを髪の毛でぬぐった。

②香油は 300 グラムもあり、その価値は 300 デナリ以上であった。

＊労働者のほぼ年収分に相当する。

＊このような香油は、普通は女性が新婚の夜のために取っておくものである。

③部屋の中は香油の香りで満ちた。

2. 弟子たちの反応（4～6 節）

Joh 12:4 ところが、弟子のひとりで、イエスを裏切ろうとしているイスカリオテ・ユダが言った。

Joh 12:5 「なぜ、この香油を三百デナリに売って、貧しい人々に施さなかったのか。」

(1) 4～5 節

①ユダはイエスを裏切ろうとしていた（後で明らかになった情報である）。

②マタ 26 : 8

「弟子たちはこれを見て、憤慨して言った。『何のために、こんなむだなことをするのか。この香油なら、高く売れて、貧しい人たちに施しができたのに』」

＊弟子たちも憤慨したが、動機は純粋なものだった。

＊不平不満は容易に群れ全体に広がるものである。

(2) 6 節

Joh 12:6 しかしこう言ったのは、彼が貧しい人々のことを心にかけていたからではなく、彼は盗人であって、金入を預かっていたが、その中に収められたものを、いつも盗んでいたからである。

- ①ユダの動機は歪んでいた。
- ②彼は、金入れから預かったものを盗んでいた。
- ③この香油も、売れば金になると考えた。

3. イエスの教え（7～8 節）

（1）7 節

Joh 12:7 イエスは言われた。「そのままにしておきなさい。マリヤはわたしの葬りの日のために、それを取っておこうとしていたのです。」

- ①イエスは、マリヤがなぜ香油を注いだのかを知っておられた。
- ②マタ 26：12
「この女が、この香油をわたしのからだに注いだのは、わたしの埋葬の用意をしてくれたのです」
- ③マリヤは、イエスの死の時が近いことを理解した。

（2）8 節

Joh 12:8 あなたがたは、貧しい人々とはいつもいっしょにいるが、わたしとはいつもいっしょにいるわけではないからです。」

- ①弟子たちには、これからも貧しい人々に仕えるチャンスがある。
- ②イエスの埋葬の用意ができるのは、この時だけである。
- ③イエスの死後、数名の婦人たちが墓に行ってイエスを埋葬しようとした。
*しかし、それは実現せず、彼女たちは復活のイエスに出会って驚いた。

結論：

1. イスラエルの祭りとメシアの生涯

（1）レビ記 23 章にイスラエルの祭りに関する規定がある。

- ①春の祭りは 4 つある。
 - *過越の祭り
 - *種なしパンの祭り
 - *初穂の祭り
 - *七週の祭り（五旬節）
- ②秋の祭りは 3 つある。
 - *ラッパの祭り
 - *贖罪の日
 - *仮庵の祭り

(2) イスラエルの祭りは、メシアの生涯の枠組みを提供している。

①春の祭りは、メシアの初臨の枠組みである。

*過越の祭りは、メシアの贖罪死の枠組みである。

②秋の祭りは、メシアの再臨の枠組みである。

*秋の祭りが示していることは、これから成就する。

2. 4 組の登場人物たち

(1) ユダヤ人の指導者たち

①真っ先にイエスを信じ、民にそれを教えるべき人たちである。

②真っ先にイエスを拒否し、イエスを殺そうとした。

③律法を教えながら、自らは律法に違反した。

④いつの時代も、リーダーの責任は重い。

(2) 弟子たち

①不平不満が広がって行った。

②動機は、貧しい人たちへの配慮である。

③イエスには、300 デナリの価値がないと判断した。

(3) イスカリオテのユダ

①動機そのものから間違っている。彼は盗人である。

②イエスを裏切ろうとしていた。

(4) マリア

①弟子たちでさえも理解していなかったことを理解していた。

②イエスの死が近いことを直感し、全財産をはたいて香油を買ったのであろう。

3. マリアの信仰

(1) ルカ 10 : 41~42

「主は答えて言われた。『マルタ、マルタ。あなたは、いろいろなことを心配して、気を使っています。しかし、どうしても必要なことはわずかです。いや、一つだけです。マリヤはその良いほうを選んだのです。彼女からそれを取り上げてはいけません』」

①マリアの信仰は、みことばを聞くことによって生まれたものである。

(2) マリアは、イエスの復活まで理解していたと思われる。

①彼女は、墓に行った婦人たちの中に含まれていない。

「過越の食事の準備」

- (1) 「ユダの裏切り」 マコ 14 : 10～11、マタ 26 : 14～16、ルカ 22 : 3～6
(2) 「過越の食事の準備」 マコ 14 : 12～16、マタ 26 : 17～19、ルカ 22 : 7～13
(朗読箇所 マタ 26 : 14～16、ルカ 22 : 7～13)

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① 「オリーブ山での説教」が終わると、イエスは十字架の死を予告した。
② その日の夕に、ベタニヤで晩餐会が開かれた。
③ 火曜日が終わり、日没後は水曜日となった。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 142 ユダはイエスを売り渡すために祭司長たちのところに行く

マコ 14 : 10～11、マタ 26 : 14～16、ルカ 22 : 3～6

§ 143 弟子たちによる過越の食事の準備

マコ 14 : 12～16、マタ 26 : 17～19、ルカ 22 : 7～13

2. アウトライン

(1) ユダの裏切り（マタ 26 : 14～16）

- ① ユダの役割（14～15a 節）
② 銀貨 30 枚の意味（15 b ～16 節）

(2) 過越の食事の準備（ルカ 22 : 7～13）

- ① 当時の習慣
② イエスの指示（7～12 節）
③ 弟子たちによる食事の準備（13 節）

3. 結論：

- (1) マリアとユダの対比
(2) イエスの決意
(3) 二階の大広間

過越の祭りを背景として、イエスが神の小羊であることを学ぶ。

I. ユダの裏切り（マタ 26 : 14～16）

1. ユダの役割（14～15a 節）

Mat 26:14 そのとき、十二弟子のひとりで、イスカリオテ・ユダという者が、祭司長たちの

ところへ行って、

Mat 26:15a こう言った。「彼をあなたがたに売るとしたら、いったいいくらくれますか。」

(1) ユダは、ベタニヤのシモンの家での晩餐から姿を消した。

①時は、火曜日の夜（水曜日になっている）である。

②イエスは、マリアの行為を批判する弟子たちを叱責した。

③ユダは、自分の動機が悪いので、叱責の言葉に衝撃を感じた。

(2) ルカ 22：3 とヨハ 13：27

Luk 22:3 さて、十二弟子のひとりで、イスカリオテと呼ばれるユダに、サタンが入った。

Joh 13:27 彼がパン切れを受けると、そのとき、サタンが彼に入った。そこで、イエスは彼に言われた。「あなたがしようとしていることを、今すぐしなさい。」

①サタンがユダに入ったタイミングはいつか。

②サタンの介入が段階を追って強くなったということか。

③いずれにしても、イエスの十字架の死にはサタンの関与があった。

④神は、サタンの悪行をご自身の計画のためにお用いになった。

⑤ユダの神は、お金であった。

⑥彼は、「悪霊憑き」ではなく、「悪魔憑き」である。

(3) 祭司長たちとの面会は、通常は不可能である。

①祭司長たちにとっては、内部通報者が出たのは朗報である。

②ユダは、彼らにとっては祈りの答えであった。

(4) ユダと祭司長たちの契約内容は、3つの条項を含む。

①イエスの居場所を教え、群衆から隠れた所で逮捕されるようにする。

*これは実現した。

②コホート（約 600 人の歩兵隊）を派遣するための証人となる。

*ローマ法では、総督の前で反逆者の逮捕を直訴する必要がある。

*これも実現した。

③ローマ法廷で原告側の証人となる。

*宗教裁判では、この役割は必要なかった。

*これは実現しなかった。

2. 銀貨 30 枚の意味（15 b～16 節）

Mat 26:15b すると、彼らは銀貨三十枚を彼に支払った。

Mat 26:16 そのときから、彼はイエスを引き渡す機会をねらっていた。

(1) 銀貨 30 枚の支払いをもって、契約は完了した。

- ①この額は、すぐに支払われた。
- ②ユダは、希望のものを手に入れた。
- ③今度は、彼が責任を果たす番である。

(2) 出 21 : 32

「もしその牛が、男奴隷、あるいは女奴隷を突いたなら、牛の持ち主はその奴隷の主人に銀貨三十シケルを支払い、その牛は石で打ち殺されなければならない」

- ①銀貨 30 枚は、死んだ奴隷の命への弁済金である。
- ②ユダヤ文化の中では、銀貨 30 枚は軽蔑の象徴である。
- ③30 という数字は、忌むべき数字である。

＊キリスト教圏の 13 という数字、日本の 4 という数字

(3) ゼカ 11 : 12～13

「私は彼らに言った。『あなたがたがよいと思うなら、私に賃金を払いなさい。もし、そうでないなら、やめなさい。』すると彼らは、私の賃金として、銀三十シケルを量った。【主】は私に仰せられた。『彼らによってわたしが値積もりされた尊い価を、陶器師に投げ与えよ。』そこで、私は銀三十を取り、それを【主】の宮の陶器師に投げ与えた」

- ①良き羊飼いに支払われた賃金は、銀 30 シケル。無給よりも侮辱的である。
- ②良き羊飼いの価値は、銀 30 枚である。
- ③ゼカリヤはこれを陶器師に投げ与えた。最下層の仕事。
- ④この預言は、イスカリオテのユダにおいて成就した。

(4) 銀貨 30 枚は神殿の金庫から取られた。

- ①神殿の金庫の金の主な使途は、いけにえの動物を買うことである。
- ②この日、祭司長たちは、究極的な意味でそれを実行した。

(5) これで火曜日が終わった。

- ①水曜日は休息の日。
- ②木曜日は過越の食事の準備の日。
- ③金曜日は祭りの当日。

＊イエスの十字架刑は、金曜日に行われた。

＊通常の日にはちの認識とユダヤ的認識が異なることが、混乱の原因となる。

II. 過越の食事の準備（ルカ 22：7～13）

1. 当時の習慣

- (1) 過越の小羊を神殿に運び、そこで傷やしみがないう吟味される。
 - ①イエスは、4 日間にわたりユダヤ人の指導者たちの吟味を受けた。
- (2) 小羊は神殿域でほふられ、鉢で受けた血が祭壇の土台の部分に注がれる。
 - ①レビ人たちが、長い列を 3 つ作り、手渡しでその血を運ぶ。
 - ②以上のことは、午後 3 時から 6 時にかけて行われた。
- (3) 小羊は捌かれ、過越の食事の食材として家に持ち運ばれた。
 - ①祭壇で焼かれる部分は取り除かれる。
- (4) それ以外の食材が用意される。
 - ①種なしパン、苦菜、ぶどう酒など

2. イエスの指示（7～12 節）

Luk 22:7 さて、過越の小羊のほふられる、種なしパンの日が来た。

Luk 22:8 イエスは、こう言ってペテロとヨハネを遣わされた。「わたしたちの過越の食事ができるように、準備をしに行きなさい。」

Luk 22:9 彼らはイエスに言った。「どこに準備しましょうか。」

Luk 22:10 イエスは言われた。「町に入ると、水がめを運んでいる男に会うから、その人が入る家にまでついて行きなさい。」

Luk 22:11 そして、その家の主人に、『弟子たちといっしょに過越の食事をする客間はどこか、と先生があなたに言っておられる』と言いなさい。

Luk 22:12 すると主人は、席が整っている二階の大広間を見せてくれます。そこで準備をしなさい。」

- (1) 「種なしパンの日」とは、過越の祭りを含めた 8 日間のことである。
 - ①その間、エルサレム周辺に、広大なテント村ができた。
 - ②町は混雑しており、町の中で食事する場所を見つけるのは容易ではなかった。
 - ③巡礼者たちは、テントの中で過越の食事をした。
 - ④弟子たちは、どこで過越の食事をするか悩んでいたはずである。
- (2) イエスは町の中で過越の食事をしようとされた。
 - ①ペテロとヨハネにその準備を命じた。イエスは、場所を指定された。

- ②事前に言わなかったのは、ユダに知らせないためである。
- ③水がめを運ぶ男は珍しいので、すぐに見つかる。
 - * 当時は、女性が水がめを運んだ。
- ④その人が入る家までついて行く。
- ⑤その家の主人は、イエスを信じる信者であろう。
- ⑥「弟子たちといっしょに過越の食事をする客間はどこか、と先生があなたに言っておられる」と言えばよい。
- ⑦その家の主人は、席が整っている二階の大広間を見せてくれる。
 - * 大きなゲストルームである。
 - * 建物の脇に二階に上る階段が付いている。
 - * このような構造は、裕福な家だけの特徴である。

3. 弟子たちによる食事の準備（13 節）

Luk 22:13 彼らが出かけて見ると、イエスの言われたとおりであった。それで、彼らは過越の食事の用意をした。

- (1) イエスは、小さなスケールの奇跡を行っておられる。
 - ①予知能力
- (2) ペテロとヨハネは、当時の習慣に従って食事の準備をした。
 - ①席順が気になったはずである。

結論：

1. マリアとユダの対比

- (1) マリアは、300 デナリの香油をイエスに注いだ。
 - ①イエスの埋葬の準備をした。
 - ②彼女は、イエスにはこれ以上の価値があると認めていた。
- (2) ユダは、銀貨 30 枚でイエスを売り渡した。
 - ①これは死んだ奴隷の価値であった。
 - ②祭司長たちは、意図的に侮辱的な額を提示した。
 - ③ユダは、イエスの価値をその程度に見積りした。

2. イエスの決意

- (1) マタ 26:18

Mat 26:18 イエスは言われた。「都に入って、これこれの人のところに行って、『先生が「わ

わたしの時が近づいた。わたしの弟子たちといっしょに、あなたのところで過越を守ろう」と言
っておられる』と言いなさい。」

(2) 「わたしの時が近づいた」

- ①イエスは、ベツレヘムの洞窟で誕生して以来、この時のために生きて来られた。
- ②イエスは、自分の運命を理解し受容した上で、最後の奉仕をしようとしている。

(3) 「わたしの弟子たちといっしょに」

- ①この過越の祭りこそ、メシアの死の預言が成就する過越の祭りとなる。
- ②そこに弟子たちが同席する。
 - *最低 10 人の家族としての単位が必要である。
 - *イエスと弟子たちは、その家族単位を形成する。
- ③「あなたのところで過越を守ろう」
 - *この家の主人の献身的な信仰は、神に大いに祝された。

3. 二階の大広間

(1) ペテロとヨハネは、「客間はどこですか」とたずねた。

- ①ギリシア語で「kataluma」である。
- ②裕福な家には、二階に客間があった。

(2) ふたりが案内されたのは、「二階の大広間」であった。

- ①ギリシア語で「anogeon」である。
- ②席が整っている二階の大広間であった。
- ③弟子たちが期待した以上のものが用意されていた。

(3) ルカ 2 : 6～7

Luk 2:6 ところが、彼らがそこにいる間に、マリヤは月が満ちて、

Luk 2:7 男子の初子を産んだ。それで、布にくるんで、飼葉おけに寝かせた。宿屋には彼ら
のいる場所がなかったからである。

- ①宿屋は、「kataluma」である。
- ②イエスは、誕生の時には、客間さえ与えられなかった。
- ③最後の晩餐では、二階の大広間が用意された。

(4) ベタニヤのマリアに続く信仰者とは誰か。

- ①教会の伝承では、ここはヨハネ・マルコの両親の家である。
- ②使 1 章の集まりは、この場所で開かれた。

「過越の食事（1）」

(1) 「食前のことば」 ルカ 22：14～16

(2) 「第一の杯」 ルカ 22：17～18

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ベタニヤで晩餐会とユダの裏切りで、火曜日が終わった。
- ②水曜日は休息の日であった。
- ③木曜日に、ペテロとヨハネは過越の食事の準備をした。
- ④日没後（金曜日）、過越の食事が始まった。

(2) 過越の食事の手順（ロバートソンの順番とは異なる）

- ①食前のことば
- ②第一の杯
- ③洗足とユダの裏切りの予告（1）
- ④カルパス（野菜）とユダの裏切りの予告（2）
- ⑤2 枚目の種なしパン（マッツァ）
- ⑥ハロセットとユダの裏切りの予告（3）
- ⑦第三の杯
- ⑧偉大さに関する教え
- ⑨ペテロの拒否の予告
- ⑩ハレル（賛美）

(3) A. T. ロバートソンの調和表

§ 144a 「食前のことば」 ルカ 22：14～16

§ 148 「第一の杯」 ルカ 22：17～18

2. アウトライン

- (1) 食前のことば（ルカ 22：14～16）
- (2) 第一の杯（ルカ 22：17～18）

3. 結論：ルカ 22：15

- (1) 意味の解説
- (2) 私たちへの適用

過越の食事を通して新しい契約について学ぶ。

I. 食前のことば（ルカ 22：14～16）

1. 14 節

Luk 22:14 さて時間になって、イエスは食卓に着かれ、使徒たちもイエスといっしょに席に着いた。

(1) 木曜日の日没後に、イエスは二階の大広間に来られた。

①午後 6 時過ぎに食事が始まる。

②使徒たちもいっしょに席に着いた。

＊ギリシア語で「アナピプトウ」。英語で「recline」。横になる。

③当時は、コの字型の低いテーブルで食事をした。

＊左肘をついて横になり、右手で食べた。

＊日常の食事は、座って食べていた。

④ユダもともに席に着いた。

(2) 過越の食事（セデル）の手順は、中間時代に始まったとされている。

①それが今日まで継続している。式文はハガダー。

②イエスと弟子たちは、ユダヤ人たちが今も行っている手順で過越の食事をした。

(3) テーブルの上に用意された食事（出エジプトの象徴）

①小羊のロースト

②種なしパン（マッツァ）

③カルパス（野菜）

④ハロセット（クルミとリンゴを混ぜたもの）

⑤マロール（苦菜）

2. 15 節

Luk 22:15 イエスは言われた。「わたしは、苦しみを受ける前に、あなたがたといっしょに、この過越の食事をするをどんなに望んでいたことか。

(1) 「苦しみを受ける前に」

①イエスは、十字架の死が目前に迫っていることを認識していた。

(2) 「あなたがたといっしょに」

①イエスをメシアと信じた人たち

②イエスの招きに応答した人たち

③家も仕事も捨てた人たち

④3 年間生活を共にしたひとたち

(3) 「この過越の食事をするをどんなに望んでいたことか」

- ①過越の祭りは、エジプトからの解放を記念する祭りである。
- ②さらに、子羊の血による贖いを記念する祭りでもある。
- ③この過越の食事が、過越の祭りの成就である。
- ④イエスは、過越の子羊の成就である。
- ⑤イエスは、新しい出エジプトを成就される。

3. 16 節

Luk 22:16 あなたがたに言いますが、過越が神の国において成就するまでは、わたしはもはや二度と過越の食事をすることはありません。」

(1) 禁欲の誓いは、当時のユダヤ人たちの間では日常的なことであった。

- ①「〇〇となるまでは、私は〇〇を食べない」
- ②「〇〇となるまでは、私は〇〇を控える」

(2) 「過越が神の国において成就するまでは」

- ①「神の国」とは、メシア的王国である。
- ②旧約聖書は、メシアの来臨とメシア的王国の設立を預言していた。
- ③メシアの初臨は成就したが、メシア的王国の設立はまだ成就していない。
- ④メシア的王国が設立されたなら、旧約聖書の預言はすべて成就する。
- ⑤その時、神はご自身の民を安息へと導かれたことになる。

(3) これは、メシア的王国が設立される前に食される最後の過越の食事である。

- ①また、新しい契約が締結される食事でもある。
- ②贖いの血によって新しい契約が締結される。

II. 第一の杯（ルカ 22：17～18）

1. 17 節

Luk 22:17 そしてイエスは、杯を取り、感謝をささげて後、言われた。「これを取って、互いに分けて飲みなさい。」

(1) 過越の食事には 4 つの杯がある。

- ①感謝の杯（祝福の杯）（聖めの杯）
- ②裁きの杯

③贖いの杯

④賛美の杯

＊①と②は食事の前に飲んだ。

＊福音書には①と③だけが出て来る。

(2) ルカ 22：17 の杯は、①感謝の杯である。

①「感謝をささげて後」とある。

(3) 「杯」は単数形である。

①ひとつの杯を回し飲みした。

②4 回これが行われた（4 つの杯があった）。

2. 18 節

Luk 22:18 あなたがたに言いますが、今から、神の国が来る時までは、わたしはもはや、ぶどうの実で造った物を飲むことはありません。」

(1) イエスは、同じことを繰り返された。

①メシア的王国が地上に設立される。

②そうなるまでは、過越の食事をしない。

(2) 「ぶどうの実で造ったもの」

①過越の食事で飲むぶどう酒は、自然発酵したもの。

②酵母を加えて発酵を促進したものは「コシエル」ではない。

(3) ヨハ 19：30

Joh 19:30 イエスは、酸いぶどう酒を受けられると、「完了した」と言われた。そして、頭をたれて、霊をお渡しになった。

①イエスは、過越の食事をしないと言われた。

②酸いぶどう酒は、それに当たらない。

結論：ルカ 22：15

1. 意味の解説

Luk 22:15 イエスは言われた。「わたしは、苦しみを受ける前に、あなたがたと一緒に、この過越の食事をするをどんなに望んでいたことか。

(1) 訳文の比較

「どんなに望んでいたことか」（新改訳）

「切に願っていた」（新共同訳）

「切に望んでいた」（口語訳）

「望みに望みたり」（文語訳）

「With desire I have desired」（KJV、ASV）

(2) この表現は、ヘブル語（アラム語）ではよく使われた。

①ルカは、ヘブル語をギリシア語に翻訳している。

(3) ヨハ 3 : 29 の場合

Joh 3:29 花嫁を迎える者は花婿です。そこにいて、花婿のことばに耳を傾けているその友人は、花婿の声を聞いて大いに喜びます。それで、私もその喜びで満たされているのです。

① 「with joy rejoices」

(4) イエスの情熱的な願望の表現である。

2. 私たちへの適用（聖餐式の時に、この内容を思い出す必要がある）

(1) これは、愛する弟子たちとの別れの食事である。

(2) これは、愛する弟子たちに最後の説教をする場である（ヨハ 13～17 章）。

(3) これは、より偉大な出エジプト（解放）が始まるきっかけとなる食事である。

(4) これは、イエスが私たちとの親しい交わりを切望しておられることを示す食事である。

「過越の食事（2）」

ヨハ 13：1～20

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①木曜日に、ペテロとヨハネは過越の食事の準備をした。
- ②日没後（金曜日）、過越の食事が始まった。

(2) 過越の食事の手順（ロバートソンの順番とは異なる）

- ①食前のことば
- ②第一の杯
- ③洗足とユダの裏切りの予告（1）
- ④カルパス（野菜）とユダの裏切りの予告（2）
- ⑤2 枚目の種なしパン（マツツァ）
- ⑥ハロセットとユダの裏切りの予告（3）
- ⑦第三の杯
- ⑧偉大さに関する教え
- ⑨ペテロの拒否の予告
- ⑩ハレル（賛美）

(3) A. T. ロバートソンの調和表

§ 145 過越の食事で、イエスは弟子たちの足を洗う。

2. アウトライン

- (1) イエスは弟子たちの足を洗う（1～11 節）
- (2) イエスは自分が示した模範に従うように教える（12～20 節）

3. 結論：

- (1) ユダは救われていたか。
- (2) 洗足と 1 ヨハ 1：9
- (3) 洗足とピリ 2：5～8

洗足の意味について学ぶ。

Ⅲ. 洗足とユダの裏切りの予告（1）

- 1. イエスは弟子たちの足を洗う（1～11 節）

(1) 1 節

Joh 13:1 さて、過越の祭りの前に、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時が来たことを知られたので、世にいる自分のものを愛されたイエスは、その愛を残るところなく示された。

- ①ヨハネの福音書は、他の福音書よりもイエスの教えについて詳細に記している。
- ②教えの前に、イエスは先ず行動を起こされた。
- ③イエスは、「自分の時」（十字架の時）が来たことを知られた。
 - *「この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り」（新共同訳）
 - *十分な自覚と冷静さをもって十字架の時を直視された。
- ④イエスは、父なる神の御心に従順に歩まれた。
 - *十字架の死は、全人類を救うための愛の行為であった。
 - *イエスはご自身の羊（弟子たち）を特に愛された。
- ⑤「その愛を残るところなく示された」
 - *無限大の愛である。
 - *洗足、教え、十字架の死の 3 要素（ヨハ 13～19 章）

(2) 2～5 節

Joh 13:2 夕食の間のことであった。悪魔はすでにシモンの子イスカリオテ・ユダの心に、イエスを売ろうとする思いを入れていたが、

Joh 13:3 イエスは、父が万物を自分の手に渡されたことと、ご自分が神から出て神に行くことを知られ、

Joh 13:4 夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。

Joh 13:5 それから、たらいに水を入れ、弟子たちの足を洗って、腰にまといおられる手ぬぐいで、ふき始められた。

- ①第一の杯の次に、洗いの儀式（清めの儀式）が続く。
- ②ユダはすでにイエスを売ろうと決めていた。
 - *サタンの影響があった。
 - *イエスはこのことを予見しておられた（ヨハ 6：70～71）。
- ③イエスはすべてを支配しておられた（1 節と 3 節の「悟り」という言葉）。
- ④洗いの儀式の内容
 - *食事の前に、主人は客に手を洗ってもらう。しもべの仕事である。
 - *主人が行う場合もある。
 - *水差しと鉢を使って、客の手に水を注ぐ。
 - *腰に吊るしたタオルで手を拭く。
- ⑤ここでは、イエスがしもべの役割を果たしている。

* しかも、洗うのは手ではなく足である。

⑥パレスチナでは洗足は必要不可欠な習慣であった。

* 埃っぽい道路、サンダルを履いた足

* しもべに客の足を洗わせることは、重要な「おもてなし」であった。

* 妻が夫の足を洗ったり、子どもが父の足を洗ったりしていた。

* もちろん、自分で洗う人も多くいた。

(3) 6～7 節

Joh 13:6 こうして、イエスはシモン・ペテロのところに來られた。ペテロはイエスに言った。
「主よ。あなたが、私の足を洗ってくださるのですか。」

Joh 13:7 イエスは答えて言われた。「わたしがしていることは、今はあなたにはわかりませんが、あとでわかるようになります。」

①ペテロは、主であるイエスがしもべになっていることに驚いた。

* 「あなたが、私の」（語順による対比）

* 「あなたのようなお方が、私のような者の足を」

②イエスは、「あとでわかるようになります」と言われた。

* 十字架と復活が起こると、わかるようになる。

(4) 8 節

Joh 13:8 ペテロはイエスに言った。「決して私の足をお洗いにならないでください。」イエスは答えられた。「もしわたしが洗わなければ、あなたはわたしと何の関係もありません。」

①思慮のない言葉は、ペテロの特徴である。

* 二重否定 「決して」「洗わないで」

* ペテロの自信と頑なさを示す言葉

* 弟子の特徴は主に対する従順であるが、ペテロはそれに反している。

②「もしわたしが洗わなければ、あなたはわたしと何の関係もありません」

* 「何の関係もない」とは、深い意味での靈的つながりのことである。

* イエスは、ペテロの従順を試している。

③さらに、思慮に欠けるペテロの言葉が続く。

(5) 9～11 節

Joh 13:9 シモン・ペテロは言った。「主よ。私の足だけでなく、手も頭も洗ってください。」

Joh 13:10 イエスは彼に言われた。「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身きよいのです。あなたがたはきよいのですが、みながそうではありません。」

Joh 13:11 イエスはご自分を裏切る者を知っておられた。それで、「みながきよいのではない」

と言われたのである。

- ①さらにペテロの思慮に欠けた言葉が続く。
- ②彼は、極端から極端へと移動する。「手も頭も洗ってください」
- ③それに対するイエスの教え
 - *水浴した者は、家に帰ると足を洗うだけでよい。
 - *そのように、イエスを信じた者は、再度信じ直す必要はない。
- ④イエスは、ユダの裏切りを知っておられた。
 - *ヨハネは、イエスの超自然的知識を強調している。

2. イエスは自分が示した模範に従うように教える（12～20 節）

(1) 12～15 節

Joh 13:12 イエスは、彼らの足を洗い終わり、上着を着けて、再び席に着いて、彼らに言われた。「わたしがあなたがたに何をしたか、わかりますか。」

Joh 13:13 あなたがたはわたしを先生とも主とも呼んでいます。あなたがたがそう言うのはよい。わたしはそのような者だからです。

Joh 13:14 それで、主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。

Joh 13:15 わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです。

- ①「わたしがあなたがたに何をしたか、わかりますか」
 - *洗足は、弟子たちに謙遜を教えるための実物教育である。
- ②イエスは、「先生（ディダスカロス）」、「主（キュリオス）」である。
- ③弟子たちよりも上位にあるイエスが、しもべの役割を果たした。
- ④これは、弟子たちへの模範である。下位にいる者は従うしかない。
- ⑤聖礼典の3つの条件
 - *イエスが命令しておられる。
 - *使徒の働きの中でそれが実行されている。
 - *書簡の中でその意味が開示されている。
- ⑥洗足は、聖礼典に含めるべきではない。
 - *当時と今では、生活環境が違う。靴下と靴を履いている。
 - *この教えは、物理的な儀式ではなく、心の在り方を教えている。

(2) 16～17 節

Joh 13:16 まことに、まことに、あなたがたに告げます。しもべはその主人にまさらず、遣わされた者は遣わした者にまさるものではありません。

Joh 13:17 あなたがたがこれらのことを知っているのなら、それを行うときに、あなたがたは祝福されるのです。

- ①イエスの模範に従わないなら、自分をイエスよりも高く置くことになる。
- ②クリスチャンは、知識の量によって祝福されるのではない。
- ③理解したことを実行することによって祝福される。

(3) 18 節

Joh 13:18 わたしは、あなたがた全部の者について言っているのではありません。わたしは、わたしが選んだ者を知っています。しかし聖書に『わたしのパンを食べている者が、わたしに向かってかかとを上げた』と書いてあることは成就するのです。

①祝福されない弟子がひとりいる。イスカリオテのユダである。

②詩 41：9 のダビデの預言

「私が信頼し、私のパンを食べた親しい友までが、私にそむいて、かかとを上げた」

＊ダビデは、アヒトフェルによって裏切られた。

＊これは、メシア預言である。

(4) 19～20 節

Joh 13:19 わたしは、そのことが起こる前に、今あなたがたに話しておきます。そのことが起こったときに、わたしがその人であることをあなたがたが信じるためです。

Joh 13:20 まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしの遣わす者を受け入れる者は、わたしを受け入れるのです。わたしを受け入れる者は、わたしを遣わした方を受け入れるのです。」

- ①イエスの予告は、後になってイエスを信じるための証拠となった。
- ②神はイエスを派遣し、イエスは弟子たちを派遣する。
- ③弟子たちを受け入れることは、イエスを受け入れることであり、イエスを受け入れることは、父なる神を受け入れることである。

結論：

1. ユダは救われていたか。

Joh 13:10 イエスは彼に言われた。「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身きよいのです。あなたがたはきよいのですが、みながそうではありません。」

(1) 水浴した者は、全身きよい。

①これは、イエスを信じた者は罪が赦されていることを示している。

②イエスの血潮による清めである。

(2) みながそうではないとは、イスカリオテのユダのことである。

①ユダは、救われていなかった。

②彼は、洗足という形式を経験したが、霊的な意味は知らなかった。

③ユダの滅びから、救いを失う可能性がある」と論じてはならない。

2. 洗足と 1 ヨハ 1 : 9

(1) 洗足は、弟子たちへの教訓である。

(2) と同時に、霊的適用もある。

1Jn 1:9 もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

①イエスを信じた時に、全身が清くなっている。

②日々の歩みの中で、罪を犯す可能性がある。

③これは、足を洗っていただく行為である。

④ペテロは、洗足の際のイエスのことばによって立ち直ることができた。

3. 洗足とピリ 2 : 5～8

Php 2:5 あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。

Php 2:6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、

Php 2:7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、

Php 2:8 自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。

(1) イエスは、自らの神性を自覚しておられた。

(2) イエスは、自らの使命を自覚しておられる。

(3) イエスは、しもべとしての歩みを全うされた。

①神でなくなることはできない。

②神のあり方を捨てた。

(4) マルコの福音書とヨハネの福音書

①マコは「しもべとしてのキリスト」と伝えている。

②ヨハは「神の子としてのキリスト」を伝えている。

③洗足の記事がマコではなくヨハに登場するのは、驚きである。

「過越の食事（3）」

マコ 14：18～21、ルカ 22：19

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①木曜日に、ペテロとヨハネは過越の食事の準備をした。
- ②日没後（金曜日）、過越の食事が始まった。

(2) 過越の食事の手順（ロバートソンの順番とは異なる）

- ①食前のことば
- ②第一の杯
- ③洗足とユダの裏切りの予告（1）
- ④カルパス（野菜）とユダの裏切りの予告（2）
- ⑤2 枚目の種なしパン（マッツァ）
- ⑥ハロセットとユダの裏切りの予告（3）
- ⑦第三の杯
- ⑧偉大さに関する教え
- ⑨ペテロの拒否の予告
- ⑩ハレル（賛美）

(3) A. T. ロバートソンの調和表

§ 146a と 148b

2. アウトライン

- (1) カルパス（野菜）とユダの裏切りの予告（2）
- (2) 2 枚目の種なしパン（マッツァ）

3. 結論：

- (1) アフィコーメンの儀式の神学的意味
- (2) 過越の食事と最後の晩餐

過越の食事の中に隠されたキリストを発見する。

IV. カルパス（野菜）とユダの裏切りの予告（2）

1. 18 節

Mar 14:18 そして、みなが席に着いて、食事をしているとき、イエスは言われた。「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたのうちのひとりで、わたしといっしょに食事をしている者が、わたしを裏切ります。」

(1) 「わたしといっしょに食事をしている者が、わたしを裏切ります」

- ①詩 41：9 への言及
- ②ダビデはアヒトフェルの裏切りに会った。
- ③食卓を共にした者が裏切りを働くのは、最悪の罪である。

(2) 食事の順番

20 節の訳文の比較

- ①「わたしといっしょに鉢に浸している者」（新改訳）
- ②「わたしと一緒に鉢に食べ物を浸している者」（新共同訳）
- ③「わたしと一緒に同じ鉢にパンをひたしている者」（口語訳）
- ④「我と共にパンを鉢に浸す者」（文語訳）

(3) この段階で行うのがカルパス（野菜）の儀式である。

- ①使用されるのは、緑色野菜（パセリかレタス）である。
- ②これを塩水の中に浸して食べる。
- ③この儀式は、紅海を渡ってエジプトから解放されたことを記念するものである。

(4) 複数の塩水の鉢が分散して食卓の上に置かれている。

- ①横になって過越の食事を食するのが紀元 1 世紀のユダヤ教の律法である。
＊どんなに貧しくてもこれを実行した。
- ②2～3 人でひとつの鉢を使用した。
- ③イエスとユダは、同じ鉢を使う位置関係にあった。

(5) ここでイエスは、ユダの裏切りの予告をする。

- ①これは 2 度目の予告である。
- ②12 弟子の中でこの言葉の意味を理解したのは、ユダだけである。

2. 19 節

Mar 14:19 弟子たちは悲しくなって、「まさか私ではないでしょう」とかわるがわるイエスに言いだした。

(1) イエスの言葉は弟子たちに衝撃を与えた。

- ①ひとりひとり、自分の嫌疑を晴らして行った。

(2) ユダも同じことをした。マタ 26 : 25 参照。

Mat 26:25 すると、イエスを裏切ろうとしていたユダが答えて言った。「先生。まさか私のことではないでしょう。」イエスは彼に、「いや、そうだ」と言われた。

- ①ユダはイエスを「主」ではなく、「先生（ラビ）」と呼んでいる。
- ②質問の形式は、「ノー」という答えを期待するものである。
- ③「いや、そうだ」とは、「あなたが言った通りだ」ということ。
- ④ここでの会話は私的なもので、他の弟子たちは気付いていない。

3. 20 節

Mar 14:20 イエスは言われた。「この十二人の中のひとりで、わたしといっしょに鉢に浸している者です。」

- (1) イエスは依然として裏切り者の名を明かさない。
 - ①カルパスをとともに食している者が裏切り行為を働くのは、重大な罪である。
 - ②イエスは、ユダに悔い改めの機会を提供された。

4. 21 節

Mar 14:21 確かに、人の子は、自分について書いてあるとおりに、去って行きます。しかし、人の子を裏切るような人間はわざわざいます。そういう人は生まれなかったほうがよかったのです。」

- (1) ユダヤ教は、神の主権と人間の責務の両方を認める。
 - ①聖書信仰に立つ者もまた、神の主権と人間の責務の両方を受け入れる。
- (2) 神の主権に基づけば、キリストは預言通りに十字架の死を遂げる。
 - ①ユダの裏切りがなくても、キリストの死は成就した。
- (3) 人間の責務に基づけば、ユダには責任がある。
 - ①彼はサタンの手先として動いている。
 - ②本来、存在することは祝福である。
 - ③しかし、ユダにとっては、存在することが呪いとなった。
 - ④彼は、存在目的に反することを意図的に行った。

V. 2 枚目の種なしパン（マッツァ）

1. アフィコーメンの儀式について

- (1) 3 層に分かれたマツツァ用の布袋を用意する。
 - ①そこに 3 枚のマツツァを入れる。
 - ②三位一体の神を象徴している。
- (2) 使用するマツツァの 3 つの条件
 - ①種なしパンであること
 - ②焦げ目がついていること
 - ③小さな穴が開いていること
- (3) 食事の途中で真ん中のマツツァを半分に割り、片方を麻布にくるんで隠す。
 - ①真ん中のマツツァは、第二位格の神を象徴している。
- (4) 食事の最後にそれを見つけ出し、小片に割って全員がそれを食べる。
 - ①アフィコーメンとは、デザートという意味である。

2. 19 節

Luk 22:19 それから、パンを取り、感謝をささげてから、裂いて、弟子たちに与えて言われた。「これは、あなたがたのために与える、わたしのからだです。わたしを覚えてこれを行いなさい。」

- (1) イエスが弟子たちに与えたパンは、アフィコーメンである。
 - ①ユダヤ教のラビたちは、アフィコーメンの儀式を神学的に説明できない。
 - ②メシヤニックジューたちは、その意味を深く理解している。
 - ③聖餐式の目的は、イエスの御業を記念することである。

3. 教理的誤り

- (1) 化体説 (Transubstantiation)
 - ①パンがキリストの体に変化する。
 - ②カトリック教会の立場である。
- (2) 実体共存説 (Consubstantiation)
 - ①カトリック教会の化体説を認めない立場である。
 - ②ルター派と聖公会がこの説に立つ。
- (3) 霊的存在説 (The Spiritual Presence)
 - ①キリストの体と血は、パンとぶどう酒の中に物理的にではなく、霊的に存在し

ている。

②ジョン・カルバンの立場である。

③従って、改革派の教会の立場となっている。

(4) 記念説 (A Memorial)

①聖餐式は、イエスを記念するために行うものである。

②宗教改革者の中では、ツウィングリ (スイスの宗教改革者) が提唱した。

③最も聖書的な説である。

結論：

1. アフィコーメンの儀式の神学的意味

(1) 種なしパンであること

①イエスは罪のないお方であることを象徴している。

(2) 焦げ目がついていること

①茶色の焦げ目は、イエスが受けた鞭の痕を象徴している。

Isa 53:5 しかし、彼は、／私たちのそむきの罪のために刺し通され、／私たちの咎のために砕かれた。／彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、／彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。

②私たちの霊的な傷が癒されたということ。

(3) 小さな穴が無数に開いていること

①穴は、イエスが刺し通されたことを象徴している。

②茨の穴、釘の穴、槍の穴

③詩 22 : 16

Psa 22:16 犬どもが私を取り囲み、／悪者どもの群れが、私を取り巻き、／私の手足を引き裂きました。

④ゼカ 12 : 10

Zec 12:10 わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと哀願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見、ひとり子を失って嘆くように、その者のために嘆き、初子を失って激しく泣くように、その者のために激しく泣く。

(4) イエスは砕かれ、亜麻布にくるまれ、墓の中に隠された。

①隠されたマツツアを見つけ、それを割り、全員がその小片を食する。

②私たちは、イエスの贖いの死を受け入れ、それを体験する。

2. 過越の食事と最後の晚餐

(1) 過越の食事は、神がイスラエルの民をエジプトから解放されたことを記念する（思い出す）ためのものである。

(2) 最後の晚餐は、霊的解放を記念する（思い出す）ためのものである。

①イエスは、「わたしを覚えてこれを行いなさい」と言われた。

②聖餐式の目的は、イエスが十字架上で為してくださったことを記念する（思い出す）ことである。

(3) 1 コリ 11 : 23～26

1Co 11:23 私は主から受けたことを、あなたがたに伝えたのです。すなわち、主イエスは、渡される夜、パンを取り、

1Co 11:24 感謝をささげて後、それを裂き、こう言われました。「これはあなたがたのための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい。」

1Co 11:25 夕食の後、杯をも同じようにして言われました。「この杯は、わたしの血による新しい契約です。これを飲むたびに、わたしを覚えて、これを行いなさい。」

1Co 11:26 ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです。

①記念のため

②主の再臨を待ち望むため

「過越の食事（4）」

ヨハ 13 : 21～30、マタ 26 : 27～29

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①木曜日に、ペテロとヨハネは過越の食事の準備をした。
- ②日没後（金曜日）、過越の食事が始まった。

(2) 過越の食事の手順（ロバートソンの順番とは異なる）

- ①食前のことば
- ②第一の杯
- ③洗足とユダの裏切りの予告（1）
- ④カルパス（野菜）とユダの裏切りの予告（2）
- ⑤2 枚目の種なしパン（マツツァ）
- ⑥ハロセットとユダの裏切りの予告（3）
- ⑦第三の杯
- ⑧偉大さに関する教え
- ⑨ペテロの拒否の予告
- ⑩ハレル（賛美）

(3) A. T. ロバートソンの調和表

§ 146b と 148c

2. アウトライン

- (1) ハロセットとユダの裏切りの予告（3）（ヨハ 13 : 21～30）
- (2) 第三の杯（マタ 26 : 27～29）

3. 結論：

- (1) ヨハ 13 : 30 の意味
- (2) 「契約の血」の意味
- (3) 新しい契約の意味
- (4) 聖餐式の意味

過越の食事の中に隠されたキリストを発見する。

VI. ハロセットとユダの裏切りの予告（3）（ヨハ 13 : 21～30）

1. テーブルの上に用意された食事（出エジプトを記念する食物）

- (1) 小羊のロースト
- (2) 種なしパン（マッツァ）
- (3) カルパス（野菜。パセリやレタス）
- (4) ハロセット
 - ①（リンゴ、ナッツ、蜂蜜、シナモン、レモンジュース、ワイン）
 - ②レンガを作る粘土の色をしている。
- (5) マロール（苦菜。西洋わさび）
 - ①奴隷時代に流した涙を思い起こす。
- (6) ハロセットの食べ方
 - ①主人が客全員にハロセットを配る。
 - ②マッツァの小片でハロセットを鉢から取り出す。
 - ③ハロセットの上にマロールを少量乗せる。
 - ④別のマッツァの小片をその上に乗せ、サンドイッチ状のものを作る。
 - ⑤それを、それぞれの客に配る。

2. 21～22 節

Joh 13:21 イエスは、これらのことを話されたとき、霊の激動を感じ、あかしして言われた。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたのうちのひとりが、わたしを裏切ります。」

Joh 13:22 弟子たちは、だれのことを言われたのか、わからずに当惑して、互いに顔を見合わせていた。

- (1) ヨハネの福音書は、イエスが「神の子」であることを強調している。
 - ①イエスは神である。
 - ②イエスはユダの裏切りを知っておられた。
 - ③それでも、人としてのイエスの心は、大きく動揺した。
- (2) 「あなたがたのうちのひとりが、わたしを裏切ります」
 - ①これは、ユダの裏切りの 3 度目の予告である。
 - ②これは、ユダに与えた最後の悔い改めの機会である。
 - ③ユダは、それに応答しなかった。
- (3) 弟子たちは当惑した。
 - ①ユダが裏切り者だとは誰も考えなかった。
 - ②ユダは巧妙に、自分の本音を隠していた。

3. 23～24 節

Joh 13:23 弟子のひとりで、イエスが愛しておられた者が、イエスの右側で席に着いていた。

Joh 13:24 そこで、シモン・ペテロが彼に合図をして言った。「だれのことを言っておられるのか、知らせなさい。」

(1) イエスと弟子たちの位置関係

- ①「イエスが愛しておられた者」とは、ヨハネのことである。
- ②右端からユダ、イエス、ヨハネ、…最後にペテロ。
- ③ヨハネが 1 番目の上席、ユダが 2 番目の上席に着いていた。

(2) ペテロは、イエスに聞くようにと、ヨハネに合図を送った。

- ①この時弟子たちは、二振りの剣を用意していた。
- ②恐らくペテロは、裏切り者を追放しようとしたのであろう。

4. 25～27 節

Joh 13:25 その弟子は、イエスの右側で席に着いたまま、イエスに言った。「主よ。それはどれですか。」

Joh 13:26 イエスは答えられた。「それはわたしがパン切れを浸して与える者です。」それからイエスは、パン切れを浸し、取って、イスカリオテ・シモンの子ユダにお与えになった。

Joh 13:27 彼がパン切れを受けると、そのとき、サタンが彼に入った。そこで、イエスは彼に言われた。「あなたがしようとしていることを、今すぐしなさい。」

(1) ヨハネはイエスに質問した。

- ①これは、密かな質問である。

(2) イエスもまた密かに答えたことであろう。

- ①わたしがハロセットを与える者である。
- ②イエスは、友情のしるしとしてユダにハロセットを与えた。
- ③この行為が裏切り者を特定するものとなった。

(3) 「そのとき、サタンが彼に入った」

- ①聖書の中で最も恐ろしい言葉である。
- ②ユダは、完全にサタンの手先となった。

(4) 「あなたがしようとしていることを、今すぐしなさい」

- ①すべての状況を支配しているのは、サタンではなくイエスである。

- ②「なんちが爲すことを速かに爲(な)せ」(文語訳)
- ③「do quickly」(KJV、ASV)
- ④「あなたがしようとしていることを、もっと早くしなさい」の意。
- ⑤ユダヤ人の指導者たちは、イエスの逮捕を過越の祭り以降に予定していた。
- ⑥しかし、神の小羊イエスは、過越の祭りの間に死ぬ必要があった。

5. 28～29 節

Joh 13:28 席に着いている者で、イエスが何のためにユダにそう言われたのか知っている者は、だれもなかった。

Joh 13:29 ユダが金入れを持っていたので、イエスが彼に、「祭りのために入用の物を買え」と言われたのだとか、または、貧しい人々に何か施しをするように言われたのだとか思った者も中にはいた。

(1) ヨハネによる回顧

- ①弟子たちは、ユダが裏切り者であることに気づいていなかった。
 - ②ヨハネ自身も、気づいていなかった。
-
- (2)「あなたがしようとしていること」という言葉の誤解があった。
 - ①祭りのために入用の物を買う。
 - ②貧しい人々への慈善を行う。
 - ③仲間は欺けても、イエスを欺くことはできない。

6. 30 節

Joh 13:30 ユダは、パン切れを受けるとすぐ、外に出て行った。すでに夜であった。

(1) ユダが出て行ったタイミング

- ①食事の途中である。
- ②第 3 の杯を飲む前である。
- ③時は夜であった。ヨハネの福音書では、特別な意味がある。

VII. 第 3 の杯 (マタ 26 : 27～29)

1. 27～28 節

Mat 26:27 また杯を取り、感謝をささげて後、こう言って彼らにお与えになった。「みな、この杯から飲みなさい。

Mat 26:28 これは、わたしの契約の血です。罪を赦すために多くの人のために流されるものです。

(1) 過越の食事の 4 つの杯

- ①感謝の杯（祝福の杯）
- ②裁きの杯
- ③贖いの杯
- ④賛美の杯

(2) ①と②は食事の前に、③と④は食事の後に飲んだ。

- ①これは、第 3 の杯である。
- ②ルカ 22 : 20

Luk 22:20 食事の後、杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたのために流されるわたしの血による新しい契約です。

- ③贖いの杯は、過越の子羊の流された血を象徴している。
- ④この杯は、神の小羊イエスの血を象徴するものとなる。

(3) 「契約の血」

- ①イエスの血潮は、新しい契約のしるしである。
- ②ぶどう酒は、イエスの血潮の象徴である。
- ③イエスの血潮は、罪の赦しのために流されるものである。

2. 29 節

Mat 26:29 ただ、言っておきます。わたしの父の御国で、あなたがたと新しく飲むその日までは、わたしはもはや、ぶどうの実で造った物を飲むことはありません。」

(1) 父の御国

- ①メシア的王国のことである。
- ②これは、メシア的王国が設立される前の最後の過越の食事である。

結論：

1. ヨハ 13 : 30 の意味

「ユダは、パン切れを受けるとすぐ、外に出て行った。すでに夜であった」（ヨハ 13 : 30）

(1) 「夜」の象徴的意味

- ①他の福音書であれば「夜」というのは単なる時間の情報である。
- ②ヨハネの福音書には、「光と闇の葛藤」というサブテーマがある。

(2) ヨハ 3 : 18~19

「御子を信じる者はさばかれない。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかった

ので、すでにさばかれている。そのさばきというのは、こうである。光が世に来ていのに、人々は光よりもやみを愛した。その行いが悪かったからである」

(3) ヨハ 8 : 12

「イエスはまた彼らに語って言われた。『わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです』」

(4) ヨハ 1 : 5、12 : 35、12 : 46 参照

(5) ユダは、光を拒否してやみの中を歩むことに決めた。

2. 「契約の血」の意味

(1) 「これは、わたしの契約の血です。罪を赦すために多くの人のために流されるものです」(マタ 26 : 28)

①異邦人には理解しがたい言葉である。

②イエスは、旧約聖書に出て来る血の契約を前提にこの言葉を語っている。

③血の契約は、最も厳粛な契約である。

(2) アブラハム契約は血の契約である。

「さて、日は沈み、暗やみになったとき、そのとき、煙の立つかまどと、燃えているたいまつが、あの切り裂かれたものの間を通り過ぎた」(創 15 : 17)

(3) シナイ契約は血の契約である。

「そこで、モーセはその血を取って、民に注ぎかけ、そして言った。『見よ。これは、これらすべてのことばに関して、【主】があなたがたと結ばれる契約の血である』」(出 24 : 8)

3. 新しい契約の意味

(1) イエスの血潮が流されたことによって結ばれた最も厳粛な契約である。

(2) イエスの血潮は新しい契約のしるしとなった。

(3) エレミヤが預言していた契約である。

①エレ 31 : 31～37

②心にキリストの律法が書き記される契約である。

③聖霊の内住が成就する契約である。

4. 聖餐式の意味

(1) パンは、アフィコーメンの儀式で用いられる真ん中のマツツァである。

(2) ぶどう酒は、第 3 の杯（贖いの杯）である。

(3) 過越の祭りが予表していたことはすべてイエス・キリストにあって成就したことを記念し、また宣言しているのである。

「過越の食事（5）」

ルカ 22 : 24～30、ヨハ 13 : 31～35、ルカ 22 : 31～38

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①最後の晩餐は、過越の食事であった。
- ②第 3 の杯の前に、ユダは席を離れた。
- ③第 3 の杯（贖いの杯）が「契約の血」の象徴となった。

(2) 過越の食事の手順（ロバートソンの順番とは異なる）

- ①食前のことば
- ②第一の杯
- ③洗足とユダの裏切りの予告（1）
- ④カルパス（野菜）とユダの裏切りの予告（2）
- ⑤2 枚目の種なしパン（マツツァ）
- ⑥ハロセットとユダの裏切りの予告（3）
- ⑦第三の杯
- ⑧偉大さに関する教え
- ⑨ペテロの拒否の予告
- ⑩ハレル（賛美）

(3) A. T. ロバートソンの調和表

§ 144b と 147

2. アウトライン

- (1) 偉大さに関する教え（ルカ 22 : 24～30）
- (2) ペテロの拒否の予告
 - ①新しい戒め（ヨハ 13 : 31～35）
 - ②ペテロの裏切りの予告（ルカ 22 : 31～38）
- (3) ハレル（賛美）（マタ 26 : 30）

3. 結論：

- (1) ペテロの体験とヨブ記の関係
- (2) 1 コリ 10 : 13 の意味

過越の食事の中に隠されたキリストを発見する。

VI. 偉大さに関する教え（ルカ 22：24～30）

1. 24 節

Luk 22:24 また、彼らの間には、この中でだれが一番偉いだろうかという論議も起こった。

(1) ここには人間の心の問題が現れている。

- ①裏切り者が出るという予告があった直後のことである。
- ②第3の杯によって新しい契約が結ばれた直後のことである。
- ③イエスは、数時間後に十字架につけられようとしている。
- ④しかし、弟子たちはメシア的王国がすぐに来ると思いつけている。
- ⑤彼らの関心事は、だれが一番偉いかということである。

2. 25～26 節

Luk 22:25 すると、イエスは彼らに言われた。「異邦人の王たちは人々を支配し、また人々の上に権威を持つ者は守護者と呼ばれています。

Luk 22:26 だが、あなたがたは、それではいけません。あなたがたの間で一番偉い人は一番年の若い者のようになりなさい。また、治める人は仕える人のようでありなさい。

(1) イエスは、この世と教会（信者の共同体）の違いを教える。

- ①この世では、上位の者が下位の者を支配する。
- ②権威を持つ者は、「守護者」（恩人）と呼ばれている。
- ③彼らは、タイトルが偉大なだけであって、人格が優れているわけではない。
- ④多くの場合、王たちは残酷な者たちであった。

(2) 教会の価値観

- ①偉くなりたいなら、一番年の若い者のようになれ（中東の文化的背景）。
- ②上に立つ人は、身を低くして仕えよ。

3. 27 節

Luk 22:27 食卓に着く人と給仕する者と、どちらが偉いでしょう。むしろ、食卓に着く人でしょう。しかしわたしは、あなたがたのうちにあって給仕する者のようにしています。

(1) イエスの手本

- ①イエスは、給仕する者のように歩んで来られた。
- ②イエスは、仕えるために来られた。
- ③イエスに従う者は、イエスを模倣する必要がある。

4. 28～30 節

Luk 22:28 けれども、あなたがたこそ、わたしのさまたまの試練の時にも、わたしについて来てくれた人たちです。

Luk 22:29 わたしの父がわたしに王権を与えてくださったように、わたしもあなたがたに王権を与えます。

Luk 22:30 それであなたがたは、わたしの国でわたしの食卓に着いて食事をし、王座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです。

(1) イエスは、弟子たちの献身を高く評価された。

- ①今、弟子たちは、誰が一番偉いかと議論している。
- ②間もなく、イエスを捨てて逃げようとしている。
- ③しかしイエスは、彼らの心を知っておられた。

(2) 献身に対する報償が約束された。

- ①父なる神は子なる神に、メシア的王国での王権を約束された。
- ②イエスは、ダビデの王座に着くために地上に戻ってくる。
- ③その時、弟子たちはイスラエルの 12 部族を裁く地位に着く。

VII. ペテロの拒否の予告（ヨハ 13：31～35、ルカ 22：31～38）

1. 新しい戒め（ヨハ 13：31～35）

- ①第 3 の杯と第 4 の杯の間に、教えや討論の時間が置かれる。
- ②ここでのイエスの教えは、そのタイミングで与えられたものである。
- ③ユダが出て行ったので、急激に十字架への道が開かれた。

(1) 31～32 節

Joh 13:31 ユダが出て行ったとき、イエスは言われた。「今こそ人の子は栄光を受けました。また、神は人の子によって栄光をお受けになりました。

Joh 13:32 神が、人の子によって栄光をお受けになったのであれば、神も、ご自身によって人の子に栄光をお与えになります。しかも、ただちにお与えになります。

- ①イエスは、十字架の死が目前であることを前提に語っておられる。
- ②この 2 節に、栄光を受けるという動詞が 5 回も出て来る（日本語訳は 4 回）。
- ③栄光とは、イエスの十字架の死を表している。
- ④イエスの死によって父なる神も栄光をお受けになる。神の愛が啓示された。
- ⑤父なる神が御子の与える栄光とは、復活のことである。
- ⑥父なる神は、メシア的王国の成就を待たずして、御子を栄光の座に着かせる。

(2) 33 節

Joh 13:33 子どもたちよ。わたしはいましばらくの間、あなたがたといっしょにいます。あなたがたはわたしを捜すでしょう。そして、『わたしが行く所へは、あなたがたは来ることができない』とわたしがユダヤ人たちに言ったように、今はあなたがたにも言うのです。

- ①「こどもたちよ」（テクニア）とは、「小さな子どもたち」の意。
- ②ヨハネの福音書では、イエスがこの言葉を使うのはここだけである。
- ③弟子たちに対するイエスの心配りが表現されている。
- ④ユダが去ってからこの言葉を使っている。
- ⑤イエスは、この世を去ろうとしている。
- ⑥これは、死、復活、昇天の預言である。

(3) 34～35 節

Joh 13:34 あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。

Joh 13:35 もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」

- ①モーセの律法では、自分自身を愛するように隣人を愛せ、であった。
*ここでは、隣人愛の命令に新しい要素が加わる。
- ②「わたしがあなたがたを愛したように」
*イエスが隣人愛の手本となる。
- ③誰が一番偉いかという議論とは、180 度異なる教えである。
- ④信者のしるしは、外面的な飾りではなく、兄弟姉妹に対する「愛」である。
- ⑤イエスが不在の間、11 人の弟子たちは愛を武器として生き延びるのである。

2. ペテロの裏切りの予告（ルカ 22：31～38）

(1) 31～32 節

Luk 22:31 シモン、シモン。見なさい。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました。

Luk 22:32 しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」

- ①「シモン、シモン」という呼びかけは、イエスの愛を示している。
- ②サタンは、使徒たち全員（あなたがた）を試すことを許された。
- ③イエスは、ペテロ（あなた）のために祈られた。
*ペテロが使徒たちの代表となっている。
- ④「立ち直る」とは、失った救いを回復することではない。

＊信仰の後退（バックスライディング）からの立ち直りである。

- ⑤「兄弟たちを力づけてやりなさい」。ペテロがリーダーになることの預言。
- ⑥ペテロは、復活のイエスに出会う最初の使徒となる。

(2) 33 節

Luk 22:33 シモンはイエスに言った。「主よ。ごいっしょになら、牢であろうと、死であろうと、覚悟はできております。」

- ①ペテロは、自信過剰である。
- ②牢であろうと、死であろうと、どこまでもイエスに付いて行くと言う。
- ③これは、「自分にはイエスの祈りは必要ではない」という傲慢な言葉である。
- ④成長して初めて、自分ひとりで大きくなったのではないことが分かる。

(3) 34 節

Luk 22:34 しかし、イエスは言われた。「ペテロ。あなたに言いますが、きょう鶏が鳴くまでに、あなたは三度、わたしを知らないと言います。」

- ①マコ 14：30

Mar 14:30 イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。あなたは、きょう、今夜、鶏が二度鳴く前に、わたしを知らないと言います。」

- ②「鶏が二度鳴く」とは、時間を示す用語である。
 - ＊一番鶏は、午前 0 時。
 - ＊二番鶏は、午前 3 時。
- ③つまり、ペテロの拒否が目前に迫っているということである。

(4) 35～37 節

Luk 22:35 それから、弟子たちに言われた。「わたしがあなたがたを、財布も旅行袋もくつも持たせずに旅に出したとき、何か足りない物がありましたか。」彼らは言った。「いいえ。何もありませんでした。」

Luk 22:36 そこで言われた。「しかし、今は、財布のある者は財布を持ち、同じく袋を持ち、剣のない者は着物を売って剣を買いなさい。」

Luk 22:37 あなたがたに言いますが、『彼は罪人たちの中に数えられた』と書いてあるこのことが、わたしに必ず実現するのです。わたしにかかわることは実現します。」

- ①イエスがともにいた時には、財布、旅行袋、くつを持つ必要はなかった。
- ②それでも、不足する物はなかった。
- ③その教えが新しい内容に変更される。
- ④これから先は、必要な物は持つ。

- ⑤剣も、自衛のために持つ。
- ⑥なぜなら、イエスは預言通りに十字架にかかり死んでいくから。
- ⑦文脈が変わると、命令も変化する。

(5) 38 節

Luk 22:38 彼らは言った。「主よ。このとおり、ここに剣が二振りあります。」イエスは彼らに、「それで十分」と言われた。

- ①弟子たちは、イエスの言葉を誤解した。
- ②敵と戦い、イエスを守ろうとした。
- ③「それで十分」とは、「It is enough.」である。
*この話題はここまで、という意味である。

VIII. ハレル（賛美）（マタ 26 : 30）

Mat 26:30 そして、賛美の歌を歌ってから、みなオリーブ山へ出かけて行った。

1. 第4の杯（賛美の杯）

- (1) 最後に詩を歌うことを、「ハレル」という。

- ①詩 117～118
- ②詩 118 : 1～2

Psa 118:1 【主】に感謝せよ。／主はまことにいつくしみ深い。／その恵みはとこしえまで。

Psa 118:2 さあ。イスラエルよ、言え。／「主の恵みはとこしえまで」と。

- ③これで、過越の食事は終わった。

結論：

1. ペテロの体験とヨブ記の関係

- (1) イエスはペテロにこれから起こることを予告した。
 - ①サタンがペテロを麦のようにふるいにかけることを許された。
 - ②イエスはペテロのために祈った。

- (2) ヨブの体験と似ている（ヨブ 1 : 10～11）。

Job 1:10 あなたは彼と、その家とそのすべての持ち物との回りに、垣を巡らしたではありませんか。あなたが彼の手のわざを祝福されたので、彼の家畜は地にふえ広がっています。

Job 1:11 しかし、あなたの手を伸べ、彼のすべての持ち物を打ってください。彼はきっと、あなたに向かってのろうに違いありません。」

Job 1:12 【主】はサタンに仰せられた。「では、彼のすべての持ち物をおまえの手に任せよう。ただ彼の身に手を伸ばしてはならない。」そこで、サタンは【主】の前から出て行った。

(3) 霊の戦いの内容

- ①神は、ご自分の民を試すためにサタンを用いることがある。
- ②しかしサタンは、ヨブを苦しめる前に神から許可を得る必要がある。
- ③サタンがもたらす苦しみには、ある限界が設けられた。
- ④耐えられないほどの苦しみではない。

2. 1 コリ 10 : 13 の意味

1Co 10:13 あなたがたの会った試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えられないほどの試練に合わせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます。

(1) クリスマン生活における試練は、誰もが体験することである。

- ①使徒たちもまた、そこを通過した。

(2) 試練の中での慰め

- ①神は私たちを、耐えられないほどの試練に合わせるようなことはしない。
- ②試練とともに脱出の道も備えてくださる。
- ③大祭司であるイエスが、祈っていてくださる。

「二階部屋での説教（1）」

ヨハ 14：1～14

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①最後の晩餐が終わった。
- ②イエスの最後の長い説教が続く。ヨハネだけが記している。
 - *ヨハ 14 章 二階部屋で語られた。
 - *ヨハ 15、16 章 ゲツセマネの園に向かう途中で語られた。
- ③弟子たちを励ますために、約束と勧告が語られる。
 - *弟子たちの質問に注目すべきである。
 - *この時点での彼らの理解度が明らかになる。
- ④人類救済計画の時代区分（ディスペンセーション）が移行しつつある。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 149 二階部屋での別離の説教

2. アウトライン

(1) 父なる神への唯一の道（ヨハ 14：1～14）

- ①天の住まいの約束（1～4 節）
- ②トマスの質問（5～7 節）
- ③ピリポの質問（8～11 節）
- ④祈りが聞かれるという約束（12～14 節）

(2) 助け主の約束（ヨハ 14：15～31）

- ①もうひとりの助け主の約束（15～17 節）
- ②戻ってくるという約束（18～21 節）
- ③ユダの質問（22～26 節）
- ④平安の約束（27～31 節）

3. 結論：二階部屋での説教の意義

- (1) メシアの働きの移行
- (2) 律法の時代から恵みの時代への移行

父なる神への唯一の道について学ぶ。

I. 天の住まいの約束（1～4 節）

1. 1 節

Joh 14:1 「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。」

- (1) 弟子たちは、6 つの理由で心を騒がしていた。
- ①イエスは、彼らから去って行くと言われた。
 - ②イエスは、自分は死のうとしていると言われた。
 - ③イエスは、弟子の中のひとりが自分を裏切ろうとしていると言われた。
 - ④イエスは、ペテロがイエスを 3 度拒むと言われた。
 - ⑤イエスは、サタンが弟子たちを試みることを許されたと言われた。
 - ⑥イエスは、弟子たち全員が自分を捨てて逃げると言われた。

(2) 「あなたがたは心を騒がしてはなりません」

- ①これは、勧告である。
- ②信者は、自分の心の状態を管理する責任がある。
- ③箴 4 : 23

Pro 4:23 力の限り、見張って、あなたの心を見守れ。／いのちの泉はこれからわく。

(3) 「神を信じ、またわたしを信じなさい」

- ①神を見ていないが、信じている。
- ②そのように、わたしを見なくなるが信じなさい。
- ③イエスは、父なる神と自分を同列に置いている。
- ④心の動揺を鎮める最善の方法は、「神への信頼」である。

2. 2～3 節

Joh 14:2 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。

Joh 14:3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとの迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。

- (1) 「父の家」とは、天のことである。
- ①そこには、多くの住まいがある。
 - ②単なる気休めではない。もしそうなら、言っておいたはずである。

(2) イエスは、場所備えるために去って行く。

- ①その場所に関する情報は、少ない。
- ②贖われた人はすべて、天に住まいを持つようになる。

＊天にある新しいエルサレムである。

(3) 準備ができたなら、また戻ってくる。

- ①これは、再臨の約束ではなく、携挙の約束である。
- ②救いに予定された人たちがすべて教会に加えられた時に、携挙が起こる。
- ③携挙の目的は、イエスとともにおらせるためである。
- ④使徒たちだけでなく、教会時代の聖徒たち全員に与えられた約束である。

*1 テサ 4 : 13～18

*キリストにあつて死んだ者は復活する。

*生きている聖徒たちは、栄光の体に変えられて天に上げられる。

3. 4 節

Joh 14:4 わたしの行く道はあなたがたも知っています。」

(1) イエスは、公生涯の期間を通して、その道を教えて来られた。

- ①イエスは、苦難を通して父なる神のもとに行こうとしている。
- ②弟子たちは、イエスを通してそこに行くことができる。

II. トマスの質問（5～7 節）

1. 5 節

Joh 14:5 トマスはイエスに言った。「主よ。どこへいらっしゃるのか、私たちにはわかりません。どうして、その道が私たちにわかりましょう。」

(1) トマスはイエスのことばの意味が理解できなかった。

- ①生徒はラビに質問をして、ラビのことばの意味を確認した。
- ②イエスが地上のどこかに行こうとしていると誤解したのかもしれない。

(2) トマスの言葉は、11 人の当惑を代弁したものである。

- ①この当惑は、十字架の死、復活、聖霊降臨の時まで続く。
- ②彼らには十分な情報が与えられていたが、それを統合する力がなかった。

2. 6～7 節

Joh 14:6 イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」

Joh 14:7 あなたがたは、もしわたしを知っていたなら、父をも知っていたはずですが。しかし、今や、あなたがたは父を知っており、また、すでに父を見たのです。」

(1) 「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」

①イエスの 7 つの神性宣言の第 6 番目

②イエスは、真理といのちが、受肉したお方である。

③それゆえ、イエスを通して、真理であり、いのちである父のもとに行くことができる。

(2) 「わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません」

①救いの道は、唯一である。

②救いは、イエスというお方の中にある。

③他の道はすべて排除される。

＊律法主義

＊儀式主義

＊宗教的多元主義

④人は、恵みにより、信仰によって救われる。

(3) イエスと父との神秘的つながり

①イエスの本質を理解したなら、父を見たことになる。

②イエスは、父を啓示された。

③「今は」よりも、「今からは」が正確な訳である。

＊復活によりイエスが神のことであることが明らかになる。

＊イエスを知ったなら、父を知ったことになる。

Ⅲ. ピリポの質問（8～11 節）

1. 8 節

Joh 14:8 ピリポはイエスに言った。「主よ。私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。」

(1) ピリポは、超自然的な父の顕現を期待した。

①あるいは、シャカイナグローリーの現れを期待した。

②彼は、イエスの教えと業が父なる神の啓示であることを理解していない。

(2) 神を見たいというのは、人類の普遍的欲求である。

①この欲求が間違った方向に進むと、偶像礼拝につながる。

2. 9～11 節

Joh 14:9 イエスは彼に言われた。「ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるの

に、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください』と言うのですか。

Joh 14:10 わたしが父におり、父がわたしにおられることを、あなたは信じないのですか。わたしがあなたがたに言うことばは、わたしが自分から話しているではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざをしておられるのです。

Joh 14:11 わたしが父におり、父がわたしにおられるとわたしが言うのを信じなさい。さもなければ、わざによって信じなさい。

(1) イエスは、神の顕現は不要だとピリポを諭す。

- ①ピリポは長期間イエスといっしょにいたが、イエスの本質が見えていなかった。
- ②イエスを見た者は、父を見たのである。

(2) イエスと父の神秘的つながりを示す証拠

- ①イエスの人格（イエスは父におり、父はイエスにいる）
- ②イエスのことば（イエスが語ることばは、父のことばである）
- ③イエスの業（イエスが行う業は、父が行っている業である）

IV. 祈りが聞かれるという約束（12～14 節）

1. 12 節

Joh 14:12 まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしを信じる者は、わたしの行うわざを行い、またそれよりもさらに大きなわざを行います。わたしが父のもとに行くからです。

(1) 使徒たちは大きな業を行うようになる。

①質的な意味ではない。

＊イエスが行ったよりも奇跡の度合いが高いということではない。

②量的な意味である。

＊ペテロのメッセージで、3,000 人が救われた。

＊教会の誕生や世界宣教

(2) これが可能になるのは、イエスが昇天し聖霊を送るからである。

2. 13～14 節

Joh 14:13 またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光をお受けになるためです。

Joh 14:14 あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれを

しましょう。

- (1) 祈りの方法が新しい形に変化した。
 - ①旧約時代には、祈りは仲介者なしに、直接神に向けられた。
 - ②教会時代には、イエスを通して父なる神に祈る。
 - ③イエスは、私たちの大祭司である。
- (2) 「わたしの名によって」とは、呪文のようなものではない。
 - ①キリストの代理人として祈り、行動することである。
 - ②つまり、神の御心の沿った祈りのことである。
 - ③そのような祈りは、聞かれる。
 - ④キリストの名によって祈るためには、聖書研究が必要である。

結論：二階部屋での説教の意義

1. メシアの働きの移行

- (1) メシアの働きには3つのものがある。
 - ①預言者、②祭司、③王
- (2) イエスは、預言者の働きを終えて、祭司としての働きを開始しておられる。
 - ①イエスの祭司としての働きは、今も続いている。
 - ②再臨の時に、王としての働きが始まる。

2. 律法の時代から恵みの時代への移行

- (1) 律法の時代
 - ①イエスが十字架上で死なれた時に終わった。
 - ②イエスは、律法の要求をすべて満たされた。

- (2) 恵みの時代
 - ①聖霊降臨により始まった。
 - ②教会の誕生と聖霊の内住

- (3) 二階部屋での説教は、移行期に語られた。
 - ①律法の時代が消え去って行く。
 - ②恵みの時代が近づいてくる。

*使徒たちへの励ましは、恵みの時代を前提としたものである。

「二階部屋での説教（2）」

ヨハ 14：15～31

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①最後の晩餐が終わった。
- ②イエスの最後の長い説教が続く。ヨハネだけが記している。
 - *ヨハ 14 章 二階部屋で語られた。
 - *ヨハ 15、16 章 ゲツセマネの園に向かう途中で語られた。
- ③弟子たちを励ますために、約束と勧告が語られる。
- ④人類救済計画の時代区分（ディスペンセーション）が移行しつつある。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 149 二階部屋での別離の説教

2. アウトライン

(1) 父なる神への唯一の道（ヨハ 14：1～14）

- ①天の住まいの約束（1～4 節）
- ②トマスの質問（5～7 節）
- ③ピリポの質問（8～11 節）
- ④祈りが聞かれるという約束（12～14 節）

(2) 助け主の約束（ヨハ 14：15～31）

- ①もうひとりの助け主の約束（15～17 節）
- ②戻ってくるといふ約束（18～21 節）
- ③ユダの質問（22～26 節）
- ④平安の約束（27～31 節）

3. 結論：

- (1) 聖霊について
- (2) 平安について

助け主の約束について学ぶ。

I. もうひとりの助け主の約束（15～17 節）

1. 15 節

**Joh 14:15 もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずで
す。**

- (1) 間もなくイエスは弟子たちの前から姿を消そうとしている。
 - ①目に見えない人を、どのように愛したらよいのか。
 - ②愛する者が死んだ時、人々は涙を流すことによって愛を示す。
- (2) イエスの戒めを守ることが、イエスに対する愛を示すことである。
 - ①クリスチャンは、イエスに対する従順によって愛を示す。
 - ②イエスは、父なる神への従順によって手本を示された。
- (3) 「わたしの戒め」
 - ①福音書の中のイエスの教え
 - ②それ以降の新約聖書の教え全体
 - ③これを「キリストの律法」という。
 - ④では、いかにして「キリストの律法」を全うすることができるのか。

2. 16 節

**Joh 14:16 わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがた
にお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。**

- (1) 父なる神は、イエスの願いを聞かれる。
 - ①「お願いする」は「祈る」という意味である。
 - ②「祈る」は、通常は「アイテオウ」という動詞である。
 - * 下位の者が上位の者に対して願う際の動詞である。
 - ③ここでは、「エロウタオウ」という動詞が使われている。
 - * 同じ位の者が他者に願うという意味である。
- (2) 弟子たちに、助け主の約束が与えられる。
 - ①「パラクレート」とは、助けるために「そばに呼ばれる者」のことである。
 - * 英語で「Comforter」である。
 - ②「もうひとりの助け主」が与えられる。
 - * イエス自身が「助け主」であるが、それとは別の「助け主」が与えられる。
 - * ここでは、「アロス」（もうひとりの）が使われている。「同質」という意味。
 - * 「ヘテロス」は「異質」。
 - ③助け主は、いつまでも信者とともにおられる。

3. 17 節

Joh 14:17 その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はそ
の方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その
方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちに住まれるからです。

(1) 「もうひとりの助け主」は「真理の御霊」である。

①真理を教える。

②真理であるキリストに栄光を帰す。

(2) 世（不信者）は聖霊を受け入れることができない。

①不信者は、信じる前に見たいと願うからである。

②不信者は、聖霊の働きを理解できない。

③罪責感を覚えても、それが聖霊によるものだということを理解しない。

(3) 「あなたがた」と「世」が対比されている。

①彼らは、イエスの働きを通して、自分たちの奉仕を通して聖霊を体験してきた。

②聖霊は、彼らのそばに来て、寄り添っておられる（現在形、普遍的真理）。

③「あなたがたのうちに住まれる」は未来形。「He shall be in you.」

④ペンテコステ以降、これが事実となる。

II. 戻ってくるという約束（18～21 節）

1. 18～19 節

Joh 14:18 わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。わたしは、あなたがたのこ
ろに戻って来るのです。

Joh 14:19 いましばらくで世はもうわたしを見なくなります。しかし、あなたがたはわたし
を見ます。わたしが生きるので、あなたがたも生きるからです。

(1) イエスは弟子たちを見捨てない。

①悲劇が彼らを襲う前の励ましのことばである。

(2) イエスは弟子たちのところに戻ってくる。

①復活か。

②ペンテコステの日の聖霊降臨か。

③携挙か。

(3) これは、①か②であろう。

①弟子たちは、復活のイエスを見るようになる。

＊不信者は誰一人復活のイエスに会っていない。

②復活は、死後の復活の保証である。

③聖霊降臨は、イエスが天に昇り今も生きていることの証拠である。

＊これ以降、弟子たちは信仰によってイエスを見るようになる。

2. 20 節

Joh 14:20 その日には、わたしが父におり、あなたがたがわたしにおり、わたしがあなたがたにおることが、あなたがたにわかります。

(1) 「その日」とは、聖霊降臨の日である。

①聖霊降臨は、イエスは父のもとに帰ったことを示している。

(2) イエスと信者の関係は神秘的である。

①信者は、イエスにあって命を得ている。

②信者の内には、イエスがおられる。

③聖霊の内住は、イエスが内におられることと同じである。

3. 21 節

Joh 14:21 わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛する人です。わたしを愛する人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身を彼に現します。」

(1) 神は全人類を愛しておられる。

①それと同時に、イエスを愛する人を特別な愛で愛される。

②イエスの戒めを守る人が、イエスを愛する人である。

③イエスに従順になればなるほど、イエスとの関係が深くなる。

Ⅲ. ユダの質問（22～26 節）

1. 22 節

Joh 14:22 イスカリオテでないユダがイエスに言った。「主よ。あなたは、私たちにはご自分を現そうとしながら、世には現そうとなさらないのは、どういうわけですか。」

(1) イスカリオテでないユダ

①タダイ（マタ 10：3、マコ 3：18）

(2) 彼は、イエスが王として来られると考えていた。

①王である方は、世に姿を現さないのはおかしい。

2. 23～24 節

Joh 14:23 イエスは彼に答えられた。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。

Joh 14:24 わたしを愛さない人は、わたしのことばを守りません。あなたがたが聞いていることばは、わたしのものではなく、わたしを遣わした父のことばなのです。

- (1) イエスがご自身を現す相手は、イエスを愛する人だけである。
 - ①イエスのことばを守ることが、イエスを愛することである。
 - ②父とイエスは、その人とともに住むようになる。
- (2) 不信者は、イエスを愛さない。
 - ①イエスのことばを守らない。
 - ②それゆえ、父もイエスも見ることができない。
- (3) イエスの時代の人々よりも、今も時代の私たちの方が恵まれている。
 - ①啓示がフルに与えられている。
 - ②聖霊の助けによって、それを理解し、実践できるようになっている。
 - ③その結果、信仰の目によってイエスを見ることができるようになっている。

3. 25～26 節

Joh 14:25 このことをわたしは、あなたがたといっしょにいる間に、あなたがたに話しました。

Joh 14:26 しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。

- (1) 公生涯において、イエスは弟子たちに教えを与えた。
 - ①これ以上のことは、弟子たちには理解できない。
- (2) 十分な理解が可能になるための 3 つの条件
 - ①イエスの十字架での死
 - ②イエスの復活
 - ③聖霊降臨
 - * 聖霊は、イエスの名によって父がお遣わしになる。
 - * 聖霊は使徒たちを教え、イエスのことばを思い起こさせる。

*このことばは、新約聖書の靈感の保証である。

IV. 平安の約束（27～31 節）

1. 27 節

Joh 14:27 わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。

(1) 新約時代の別れの言葉は、「シャローム」である。

①イエスは、弟子たちに「シャローム」を残している。

(2) 平安は、イエスが弟子たちに残す遺産である。

①この世が与える平安とは異なる。

2. 28 節

Joh 14:28 『わたしは去って行き、また、あなたがたのところに来る』とわたしが言ったのを、あなたがたは聞きました。あなたがたは、もしわたしを愛しているなら、わたしが父のもとに行くことを喜ぶはずです。父はわたしよりも偉大な方だからです。

(1) 弟子たちの霊的状态は、まだ幼稚であった。

①成熟していたなら、イエスが去って父のもとに行くことを喜んだはずである。

②メシアは、辱めの段階から栄化の段階へ移行するからである。

(2) 「父はわたしよりも偉大な方だからです」

①エホバの証人は、この聖句を根拠にイエスを被造物と理解する。

②イエスは父なる神と同質である。

③イエスは受肉（辱め）を経験したが、父なる神はそうではない。

3. 29～31 節

Joh 14:29 そして今わたしは、そのことの起こる前にあなたがたに話しました。それが起こったときに、あなたがたが信じるためです。

Joh 14:30 わたしは、もう、あなたがたに多くは話すまい。この世を支配する者が来るからです。彼はわたしに対して何もすることはできません。

Joh 14:31 しかしそのことは、わたしが父を愛しており、父の命じられたとおりに行っていることを世が知るためです。立ちなさい。さあ、ここから行くのです。

(1) いまだに自己中心的な弟子たちに、あらかじめ情報が与えられた。

①実際にそうなったときに、彼らがイエスを信じるためである。

(2) これ以上話す時間がない。

①この世を支配する者（サタン）がイエスに近づいている。

②しかし、サタンはイエスに対して何の権威を振うこともできない。

③イエスが十字架にかかるのは、父なる神への従順（愛）のゆえである。

(3) 「立ちなさい。さあ、ここから行くのです」

①これで、二階部屋での説教は終わった。

②これ以降は、ゲツセマネの園に向かう途中の教えとなる。

結論：

はじめに

(1) ディスペンセーションの移行

①律法の時代から恵みの時代への移行期

②律法の時代がフェイドアウトし、恵みの時代がフェイドインしている。

③ペンテコステの日以降、聖霊の働きは新しい段階に入る。

1. クリスマンと聖霊

(1) 聖霊は、「もうひとりの助け主」である。

①聖霊が、肉体を持ったイエスに取って代わる。

②聖霊が、信者と父なる神とつなぐ役割を果たす。

(2) 聖霊は、「真理の御霊」である。

①使徒たちに真理を教え、イエスの教えを思い出させる。

②これは、使徒たちだけに与えられた祝福である。

(3) 聖霊は、信者の内に住まわれる。

①旧約時代、聖霊は必要に応じて信者の上に注がれた。

②しかし、信者の内にいつまでも留まることはなかった。

③詩 51：11 は、恵みの時代の信者には適用されない。

Psa 51:11 私をあなたの御前から、投げ捨てず、／あなたの聖霊を、私から取り去らないでください。

④恵みの時代、聖霊は信者の内に住まわれる。

⑤聖霊が内に住むことと、イエスが内に住むことは同じである。

⑥不信者は聖霊を知らないが、信者は知っている。

(4) 聖霊が取り去られることはないが、その働きが制限されることはある。

①聖霊を悲しませることは可能である（エペ 4：30）。

②聖霊を消すことは可能である（1 テサ 5：19）。

2. クリスチャンと平安（イエスのご自身の死を通して信者に与えた遺産）

(1) ロマ 5：1

Rom 5:1 ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。

①隣人との平和な関係を保持している人は、人生の成功者である。

②神との平和を持っている人は、究極的な成功者である。

(2) ピリ 4：6～7

Php 4:6 何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。

Php 4:7 そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

①祈りを通しての神との関係を保持する。

②神の平安が、私たちの心と思いを守ってくれる（キリストにあって）。

(3) ヘブ 2：14～15

Heb 2:14 そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、

Heb 2:15 一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。

①死の恐怖からの解放

②将来の不安からの解放

「ゲツセマネ途上での説教 (1)」

ヨハ 15 : 1～10

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①最後の晩餐が終わった。
- ②イエスの最後の長い説教が続く。ヨハネだけが記している。
 - *ヨハ 14 章 二階部屋で語られた。
 - *ヨハ 15、16 章 ゲツセマネの園に向かう途中で語られた。
- ③人類救済計画の時代区分 (ディスペンセーション) が移行しつつある。
- ④城壁の南側を通過して、東に向かわれた。
 - *途中に、ぶどう畑があったと思われる。
 - *イエスは、立ち止まって話されたのであろう。
 - *数時間後には、逮捕されることになっている。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 150 ゲツセマネの園に向かう途中でのメッセージ

2. アウトライン

- (1) ぶどうの木とその枝 (15 : 1～10)
- (2) イエスの友 (15 : 11～17)
- (3) この世から受ける憎しみ (15 : 18～16 : 4)
- (4) 聖霊の働き (16 : 5～15)
- (5) 悲しみから喜びへ (16 : 16～33)

3. 結論 :

- (1) 実を結ぶという意味
- (2) とどまるという意味

ぶどうの木とその枝のたとえについて学ぶ。

I. ぶどうの木とその枝 (15 : 1～10)

1. 1 節

Joh 15:1 わたしはまことのぶどうの木であり、わたしの父は農夫です。

- (1) ヨハネの福音書に出て来る 7 番目の「I am」である。

①イエスの神性宣言

(2) 旧約聖書ではイスラエルの民がぶどうの木である。

①詩 80 : 8

Psa 80:8 あなたは、エジプトから、ぶどうの木を携え出し、／国々を追い出して、それを植えられました。

②エレ 2 : 21

Jer 2:21 わたしは、あなたをことごとく／純良種の良いぶどうとして植えたのに、／どうしてあなたは、わたしにとって、／質の悪い雑種のぶどうに変わったのか。

③イザ 5 : 1～7、エゼ 15 : 1～8、ホセ 10 : 1 など参照

④イスラエルがぶどう畑にたとえられることもある。

(3) なぜイエスが「ぶどうの木」なのか。

①神はイスラエルを純良種の良いぶどうとして植えた。

②手入れをして育て、豊かな収穫を期待した。

③しかし、イスラエルは質の悪い雑種のぶどうに変わった。

*酸いぶどうの実か、腐ったぶどうの実しかならなくなった。

④イエスは、父なる神がイスラエルに対して意図されたことを成就するために来られた。

*それゆえ、イエスは「まことのぶどうの木」である。

*ほとんどの日本語訳聖書は、「まことのぶどうの木」と訳している。

*リビングバイブルは、「ほんとうのぶどうの木」と訳している。

2. 2～3 節

Joh 15:2 わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除き、実を結ぶものはみな、もっと多く実を結ぶために、刈り込みをなさいます。

Joh 15:3 あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことによって、もうきよいのです。

(1) 「それを取り除き」とは、どういう意味か。

①偽の信者は取り除かれるという意味。イスカリオテのユダがその例である。

②真の信者ではあるが、罪を犯したために救いが取り去られるという意味。

*これは、永遠の救いを保証する他の聖書の箇所から判断してあり得ない。

③真の信者であるが、信仰が後退しているので取り除かれるという意味。

*もしそうなら、これは肉体的死を意味する (1 コリ 11 : 30)。

(2) 以上の 3 つとは別の解釈

①「取り除く」という動詞 (ギリシア語のアイロウ) の意味

＊この動詞には、持ち上げる、取り上げるなどの意味がある。

②2 節は積極的に解釈することが可能である。

＊弱っている枝を持ち上げ、より多くの光と空気に触れさせる。

・「You raise me up, so I can stand on mountains.」

・2002 年。曲は Rolf Løvland、歌詞は Brendan Graham。

・現代の讃美歌のひとつになっている。

＊すでに実を結んでいる枝は、より多くの身を結ぶために刈り込みをする。

(3) 弟子たちは、イエスのことばによってきよくされている。

①洗足式の教訓

②イエスのことばを信じるなら、義認と聖化を経験する。

3. 4 節

Joh 15:4 わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。

(1) 弟子たちは、イスラエルの残れる者である。

①彼らは、「ほんとうのぶどうの木」にとどまることで、実を結び続ける。

②実を結ぶとは、御子のいのちが内に働いていることの証拠である。

③弟子たちの責務は、イエスにとどまることである。

④「実を結ばせてください」と祈るよりも、「イエスのいのちが溢れ出ますように」と祈る方がよい。

(2) 「とどまる」という動詞（ギリシア語でネノウ）

①ヨハネの神学のキーワードのひとつである。

＊ヨハネの福音書で 40 回、15 章で 11 回、書簡で 27 回出て来る。

②イエスとの関係を維持し続けることが、実を結ぶための条件である。

③祈り、聖書を読む、その教えに従う、兄弟姉妹たちとの交流など。

4. 5～6 節

Joh 15:5 わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。

Joh 15:6 だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまいます。

(1) 多くの実を結ぶ条件

- ①自分では何もできないという自覚
- ②イエスとの神秘的祈りの交流
 - *私がイエスの内に、イエスが私の中に

(2) 6 節の解釈

- ①信者であっても、救いを失う可能性がある。
 - *これは、聖書全体の教えと矛盾する。
- ②信仰は告白しているが、救われていない人のことである。
 - *しかし、この場面には信者しかいない。
- ③実を付けない信者が受ける褒賞のことである。
 - *文脈上のテーマは、「救い」ではなく「とどまること」である。
 - *イエスにとどまって実を付けないなら、その人の業績は火で焼かれる。
 - *その人自身は、救いを失わない。
 - *パウロの教え（1 コリ 3：11～15）

5. 7～8 節

Joh 15:7 あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。

Joh 15:8 あなたがたが多くの実を結び、わたしの弟子となることによって、わたしの父は栄光をお受けになるのです。

(1) 有効な祈りの条件

- ①イエスにとどまる。
- ②そういう人の内側には、イエスのことばがとどまる。
- ③それゆえ、父の御心の沿った祈りをするようになる。
- ④御心に沿った祈りは、叶えられる。

(2) マタ 6：10

Mat 6:10 御国が来ますように。／みこころが天で行われるように地でも行われますように。

(3) 聞かれた祈り

- ①これは、弟子が結ぶ多くの実のひとつである。
- ②これは、祈った人がイエスの弟子であることを証明する。
- ③それによって、父が栄光をお受けになる。

6. 9～10 節

Joh 15:9 父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛の中にとどまりなさい。

Joh 15:10 もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです。それは、わたしがわたしの父の戒めを守って、わたしの父の愛の中にとどまっているのと同じです。

(1) イエスが私たちに示される愛の本質

①父がイエスを愛したのと同じ愛である。

＊質において、深さ、高さ、幅において同じである。

＊人知を超えた愛である。

②この事実は、私たちを礼拝へと導く。

(2) イエスの愛にとどまるとは

①イエスは、実に神秘的なこの命令を、具体的な形に置き換えた。

②イエスの戒めを守ることが、イエスの愛にとどまることである。

③手本は、父に従順な歩みをされたイエスご自身である。

結論：

1. 実を結ぶという意味

(1) イザ 5：7 から見るイスラエルの失敗

Isa 5:7 まことに、万軍の【主】のぶどう畑はイスラエルの家。／ユダの人は、主が喜んで植えつけたもの。／主は公正を待ち望まれたのに、見よ、流血。／正義を待ち望まれたのに、見よ、泣き叫び。

①【主】の命令への従順

②公正

③正義

(2) 新約聖書が教える実

①義の実（ピリ 1：11）

②伝道の実（コロ 1：5～10）

③御霊の実（ガラ 5：22～23）

Gal 5:22 しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、

Gal 5:23 柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はありません。

(3) 実とは、外面に出る結果であり、内面に宿る性質である。

2. とどまるという意味

(1) 旧約聖書では、神はご自身の民とともに住むと約束された。

①住むとは、とどまるということである。

②出 25 : 8

Exo 25:8 彼らがわたしのために聖所を造るなら、わたしは彼らの中に住む。

③出 29 : 45

Exo 29:45 わたしはイスラエル人の間に住み、彼らの神となろう。

④至聖所でのシャカイナグローリーは、その証拠である。

(2) 新約聖書の教え

①イエスのいのちが実を付ける。

②信者の責務は、とどまることである。

*イエスを救い主として信じる。

*イエスを信じ続ける。

・ 1 ヨハ 2 : 24

1Jn 2:24 あなたがたは、初めから聞いたことを、自分たちのうちにとどまらせなさい。もし初めから聞いたことがとどまっているなら、あなたがたも御子および御父のうちにとどまるのです。

*愛に基づく従順を実践する。

・ ヨハ 15 : 9～10

Joh 15:9 父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛の中にとどまりなさい。

Joh 15:10 もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです。それは、わたしがわたしの父の戒めを守って、わたしの父の愛の中にとどまっているのと同じです。

(3) 低空飛行のクリスチャン生活からの脱却